中等新國文 修訂版 巻一

42
810
大14

41754
教科書文庫
4
810
41-1925
20000
73457

資料室

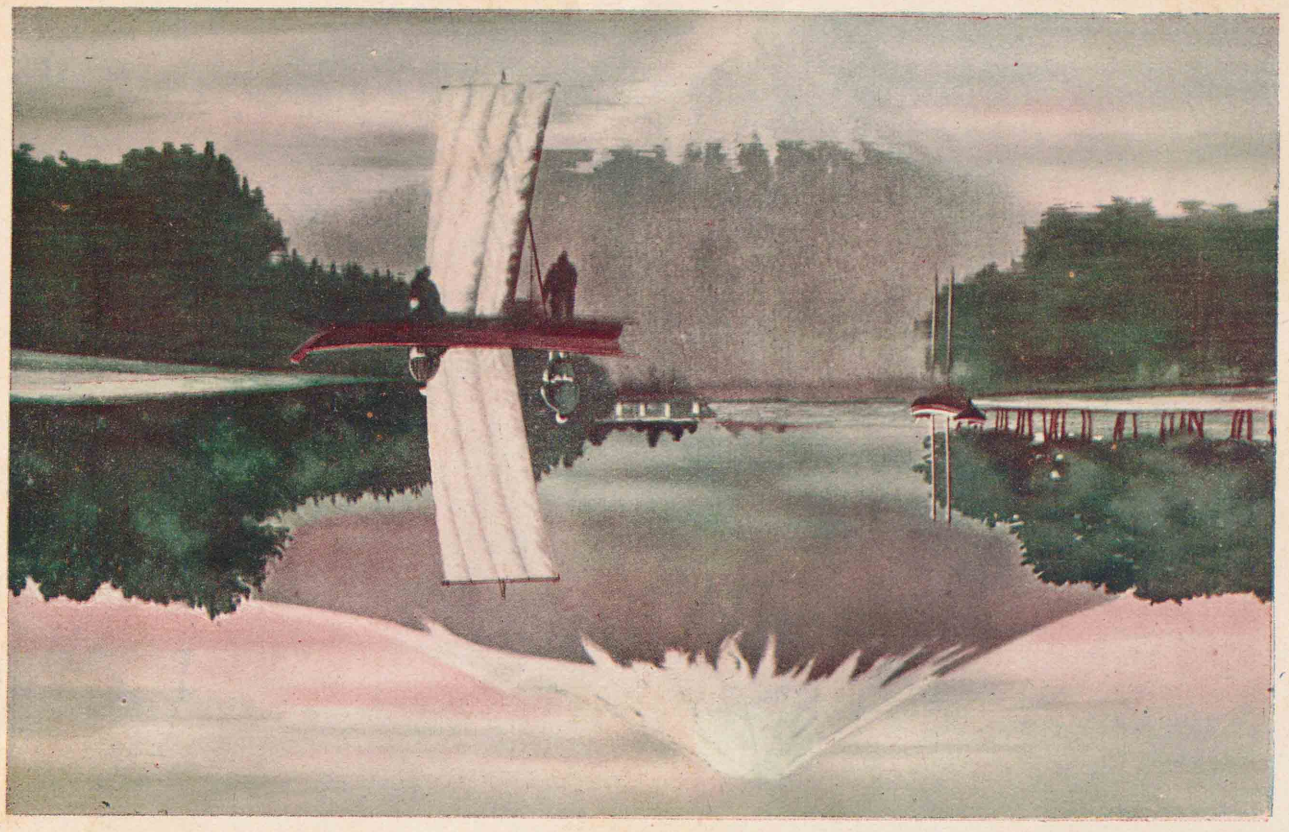
文部省檢定濟

文學博士 三矢重松編纂
國學院大學教授
宮內省御歌所寄人 鳥野幸次修訂

中等新國文

東京 文學社

4a
810
K14



千葉の海の子田

大阪市立図書館
教
73457

中等新國文　卷一

目次

一　順境（口語）……尾上柴舟……四　頁
二　春のあした（韻文）……大和田建樹……五
三　千里の春　上……同……九
四　千里の春　下……同……一九
五　東宮殿下の御着英　上（口語）……（皇太子殿下御外遊記）……一三
六　東宮殿下の御着英　下（口語）……（同）……一九
七　旅先なる父へ（候文）……二五
園藝の樂（口語）……三好學……二九
八　平和の家（口語）……德富蘆花……三三

九　乃木大將の舊宅（口語）……恩師乃木院長……三七
一〇　人間の三種三等……福澤諭吉……四一
一一　野津將軍と孝子　上（口語）……福島安正……四七
一二　野津將軍と孝子　下（口語）……同……五二
一三　犬ころ（口語）……長谷川四迷……五八
一四　動物の友情（口語）……松島種美……六五
武器を具ふる草木（口語）……原田三友……六九
一五　獅子狩（口語）……（ルーズベルト）猛獸狩日記……七二
一六　美しき天然（韻文）……武島羽衣……七七
一七　獨軍の國境突破（口語）……菊池寛……七九
一八　スパルタ武士……（國定讀本）……八四
一九　螢（口語）……渡瀬庄三郎……九〇

鵠沼の雨（口語）……德富蘆花……九五
二〇　橋中佐の最期　上……（大谷深造）……九六
二一　橋中佐の最期　下……（同　）……一〇四
空中戰の二勇士（口語）……滋野清武……一一〇
二二　布哇より（候文）……一一四
二三　香港……水野廣德……一一八
二四　峠の茶屋（口語）……夏目漱石……一二三
二五　流星（口語）……平山信……一三一
二六　震災記（口語）……吉江喬松……一三四
二七　大海原（韻文）……坪内逍遙……一四一
二八　コロンブス　上……坪内逍遙……一四四
二九　コロンブス　下……同……一四八

コロンブスの卵……（補習讀本）……一五二
三〇　國引（口語）……澁川玄耳……一五四
三一　俚諺……一五七
三二　田園の雀（口語）……北原白秋……一五八
三三　イソップ物語（口語）……一六五
三四　伊能忠敬の晩學　上……幸田露伴……一六八
三五　伊能忠敬の晩學　下……同……一七二

卷一目次終

中等新國文　卷一

一　順境

櫻咲く陽春の、本に面白い景色の時に、中等の學校に進んで來た人たちは、誠に仕合である、幸である。世に喜は色々あるが、思ひ立ったことの見込通りに行くこと位、嬉しく喜ばしいことはない。それも當前のことと思へばそれまでだが、世間の事は中々思ふ樣には運ばないもので、譬へば選拔試驗でも、學力は有っても何かの行違から外れる樣なことも無いでは

覺る

保科正之　徳川家光の弟にて會津藩主

闇齋　名は敬義、一派を開ける儒者

ない。兩親の揃った平和な家庭に育って行く子どもは、自分の幸なことを覺らないかも知れないが、さういふ幸福を得てゐない者に比べて見たらば、始めて分る事であらう。何事も順當に滯なく運んで行くことは實に好いことで喜ばしいこと、それを喜と感じ仕合と悟るが又好いことである。

昔保科正之といふ大名が師匠の山崎闇齋に向って、どういふ樂があるかと尋ねた處、闇齋は三つの樂を擧げたといふ。その一つは萬物の靈長と謂はれる人間に生れたこと、二つには太平の代に生れて學問修業の出來ること、三つには大名に生れなかったこ

縋る

と。此の第三の樂には少し理窟もあらうが、第一第二は誰でも同感してよいことで、今の人ならば第一に、萬世一系の天皇を戴く此の大日本帝國の臣民に生れたことを喜ぶべきであらう。

新入生諸子がかういふ意味の喜を感じたならば、そこに又注意すべきことが出て來よう。まづ學校の程度が高くなったのに連れて學修に一段の努力をすることが一つ。次には段々年も行って來たのであるから、先生にばかり縋らずに、自分で考へてやって行く風を養ふことが二つ。有り難い國の盛んな御代に生れて中等の教育を受ける以上は、行く〳〵役に

一廉　爪づく

立つ一廉の人物となって國家に報いようと心懸けるのが三つ。數へ立てれば幾らもあるが、先づ此の三が條を土臺として、長く今日の喜を躓かせないやうに、勇しく進んで行かなければならぬ。

作者　名は八郎、東京女子高等師範學校教授

二　春のあした

尾上柴舟

山の端

紫にほふ山のはの
雲より夜の明けゆけば、
柳のつゝみ星消えて、
野寺の鐘の音すなり。

す〜〇るなり

產土　麥生

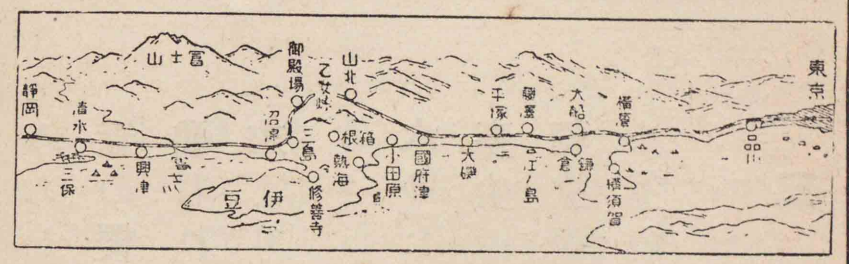
みあかし殘るうぶすなの
森の櫻の見えそめて、
鴉むれゆく松原の
末よりのぼる薄煙。

水ゆたかなる川ぞひの
麥生の霞やゝ晴れて、
朝立いそぐ旅人の
小笠の上に雲雀啼く。

作者　國文學者、明治四十三年歿す

三　千里の春　上

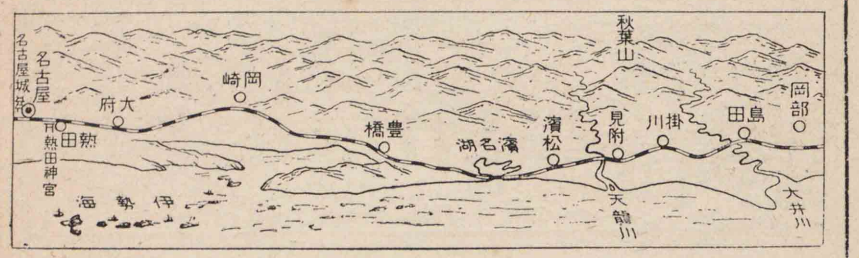
大和田建樹



東海道　一

春晴千里、山また山、水また水。近き水は澄みて山の緑を湛へ、遠き山は霞みて水と共に藍を流す。此の間に一線を曳くものは何ぞ。一列の汽車、今や東京より東海道を下りゆくなり。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫し出せるは、歌か、詩か、抑畫か。

七砲臺邊、波穏にして高く低く群れ飛ぶ鷗、落花の風に飄るに似たり。帆を半ば張りて出でゆく船あり、櫓

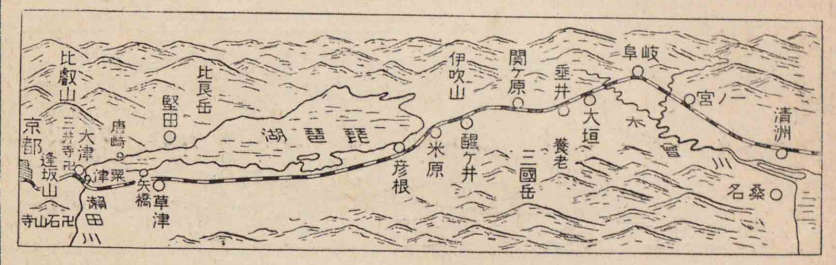


東海道　二

を操りて横ぎる舟あり。安房上總の山々は、霞に消えて影だに見えず。

松青き處に桃花の紅なるあり。藤澤の野、山北の谷、人ごとに唯美しと稱ふ。

三保の松原煙り渡りて、春は畫の如し。磯に碎けて折れ返る波、波路の末に浮き立つ雲、何物か造化の妙筆に漏れん。近き舟は行けども、遠き帆影は動かんともせず。行く手遥に見とめらるゝは伊豆なるべし。富士は



東海道三

水彩畫の如く、窓の右に立ち、又左に現る。

平原十里、麥は綠に、菜の花は黃なり。熱田の社を左に見て春風に吹かれゆけば、名古屋の城は紛れぬ影を見せ初めたり。田夫は金の鯱を指さして妻と語り、行商は旅宿の可否を評して我が好む方へと人を勸む。

彦根去り、草津來り、煙は早くも瀨田川に橫たはりて、京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡も今は何れの處

朝日將軍

木曾義仲、粟津に戰死せり

ぞ、問へども答へず。霞にたゝまるゝ遠近の山影、或は淡く或は濃く、琵琶湖の浦風收りて粟津の松原ひとり昔に似たり。

四　千里の春　下

東寺の塔は我を待ちて立ち、鴨川の水は我を迎へて歌ふ。慕はしき母にあひ、なつかしき同胞と語るに似たるは、何時も京都に着きたる時の心地なり。

・山紫に水明なる處、夢の如く現の如く、三條四條の橋をわたること日に幾度ぞ。躑躅を柴に折り添へて戴き連れたる大原女も、いつしか我が友となれり。如

詣づ

四條畫

憩、憩

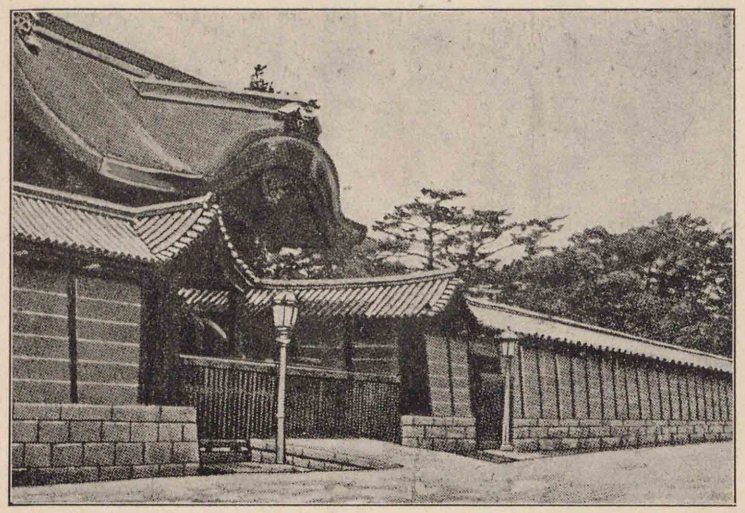
意嶽より吹き來る春風は、輕く我が袖を拂ひて遙に堤の柳の絲に去る。

花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、けふも清水觀音の堂前に充ちたり。舞臺の上より見おろす人、舞臺の下に咲きさかる花、恰も一幅の四條畫なるに、老婆は此の間に立ちて「蕨餅召せ」など呼ぶ。しばし憩ひつゝ眺めわたせば、淺黃に藍に霞み渡れる八幡・山崎のあたりもゆかしきに、東寺の塔を松の間に墨がきにせる筆の力こそ面白けれ。

燈火の影は水に映りて、星の如く花の如し。夜櫻看んとて祇園へ向ふ。一本の老木枝を垂れて、篝火の焰

山彥を反す

嵯峨の仁和寺を御室と謂ふ



京都御所

外に聳え、鐘樓は昔を說きて香雲の中に包まる。誦經に護られ、寒からぬ雪は雲なき空よりこぼれて顏を打つ。田樂を賣る聲、茶を勸むる聲、この花の前後に山彥を反し來る。

西山の花看る人は、まづ御室を指す。松青く樓門赤く、茶煙たえ〴〵に上りて、花きはめて白し。塔は霞を漏れて松風の

西陣
友禪

の聲遠く響きて、鶯の歌高き梢に在り。かさなる岩根をふみしめて生ひたつ松、その間を點綴して咲き誇る花、嵐山の春こそ今酣なれ。大井川には小舟漕ぎゆく人あり、岸の此方に眺むる人あり。渡月橋を渡り、坂を登りて大悲閣に至れば、眼下に廣げらるゝ一幅の圖、柳櫻をこきまぜて、さながら西陣を織り出せるが如く、又友禪を染めなせるが如し。

途に太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。夕陽しづかに鐘樓の瓦を染めて、春もものさびし。茶店あれども客來らず。少女は落花を風に任せて眠り、兒童は門の仁王に紙礫を打ちつけて去る。

大文字

大正十年五月七日

暮色は東山を罩め、叡山をめぐり、やうゝ鴨川に襲ひ來れり。清水の堂も半ば隱れぬ、大文字の跡も姿を隱しぬ。紫に紅に藍に墨に、見るゝ色どられゆく山影、薄く濃く青く黑く消え行く人影、いづれ詩中のものならぬはなし。天地たゞ平和、四圍たゞ寂寞。顧みれば西山もなく、北山もあらず。

（雪月花）

五　東宮殿下の御著英　上

午前八時、艦隊は威風堂々と英國の海岸に近づいた。東宮殿下を御待受してゐた英國驅逐艦九隻は海上から、飛行機十六臺は空中から、それゝ御召艦を

鵬程萬里

給うて

端的

警衛して、靜々とスピットヘッドに向った。御召艦の大檣頭には皇太子旗が飜ってゐる。在港軍艦並に商船の滿艦飾、砲臺及び軍艦より發する皇禮砲、艦上の登舷禮式、昔を語る點々たる舊臺場など、何れも私共には歡喜の種ならぬはなかった。「英國だ。愈御著英だ」と口々に無意識に繰り返した。

御召艦は十一時十分スピットヘッドに投錨した。殿下の御喜びも如何ばかりであったらう、殿下が鵬程實に一萬二千海里を航し給うて、英國に御安著になったとの報が日本に傳る時、日本國民上下の喜悅はどんなであらうなどと、端的な印象が活動寫眞の

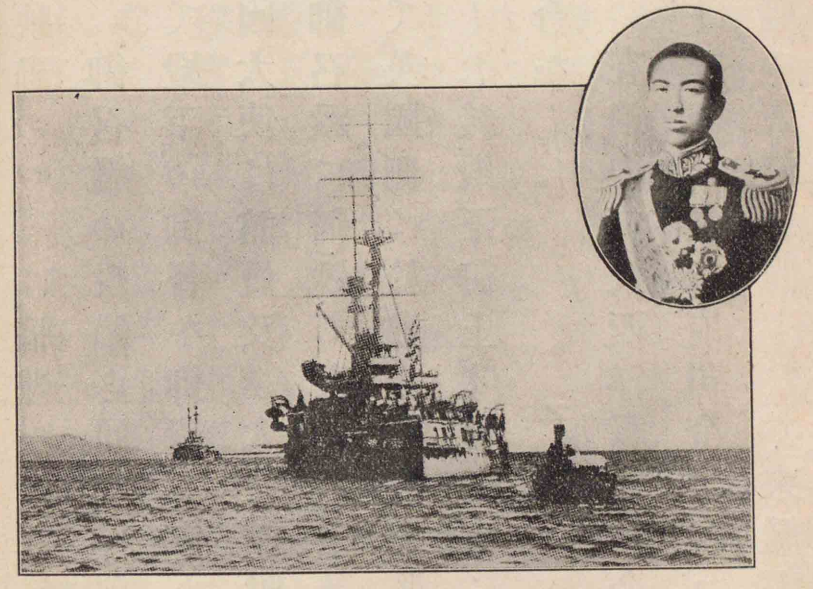
Portsmouth

男爵林權助

映畫のやうに、腦裡を過ぎ行くのであった。

御召艦の投錨と同時に、前日からポーツマスに來て殿下の御著を御待ち申上げてゐた英國駐劄林帝國大使は、館員及び大使館附陸海軍武官を同道して、御召艦に伺候し、東宮殿下及び閑院宮殿下に拜謁して、英國側に於ける御歡迎準備其の他に關して言上した後、殿下御上陸後の事について供奉員と色々打合をした。

在泊中の大西洋艦隊司令長官マッデン大將とポーツマス鎭守府司令長官コルソープ大將とは、御召艦の入港後、間もなく來艦して殿下を御訪問申上げ



東宮殿下を御召艦香取

た。殿下はこれに對して、直に大西洋艦隊の旗艦クィーン・エリザベス號に御答訪になった。

此の日、御召艦への御移乘も餘程御困難であらせられた程、波濤は高かった。しかし菊の御紋章あざやかな皇太子旗を艇首に、

詩懷を寄せる

旭日輝く軍艦旗を艇尾に飜しつゝ、御召艇が怒濤に揉まれながらも、一直線にクィーン・エリザベスに向って進んだ時には、一種の快い海國民としての誇を感ぜずには居られなかった。

我が艦隊は翌一日をポーツマスで假泊する豫定であった。世界一の海軍國たる英國の軍港で旅の假寢の夢を結び、我が東の都と同じやうに飛び交ふ鷗の群に詩懷を寄せることは、一生に二度あるべしとも思はれぬ。幾多の英國軍艦が碇泊して居るのを望みつゝ、食後甲板を逍遙すると、足の運びの奇しきばかりに輕いのを覺えた。

London

六　東宮殿下の御著英　下

翌々日午前八時、御召艦は英二海里を隔つる英國第一の軍港ポーツマスに向ひ、五十分の後、御召艦は南鐵道棧橋に横附になった。英國御入國は公式であった爲に、皇太子殿下閑院宮殿下には陸軍の御正裝、供奉員は正裝又は大禮服を著用した。

午前十時四十五分には、棧橋より宮廷列車に御乘りになってロンドンに向はせられた。驛を御發車になると、市内沿道の民衆は、鐵道沿線では勿論、線路に面する家々の窓からも、殿下に對して極めて熱心に

May Tree
Hawthorn

嘸　宛字

歡呼した。軍港地であるだけに、勞働者が多い。彼等の素樸な自然の歡迎には、さぞかし殿下も御滿足に思召された事であらうと拜察した。

五月の英國といへば、日本で四月の季節に相當する。メー・ツリーと俗に呼ばれてゐるホーソンの樹には、紅又は純白の花が爛漫と咲き匂ひ、いはゆるグリーン(芝生)は春の光に萌え出で、草原の中をゆるやかに流れる水のぬるむ季節である。平和な綠野には、牛が放牧されてゐる。二か月餘に亙る長い御航海の後に、かゝる長閑な風景を御覽になった殿下は、定めし快く思召したであらう。後に殿下がしば〳〵英國の

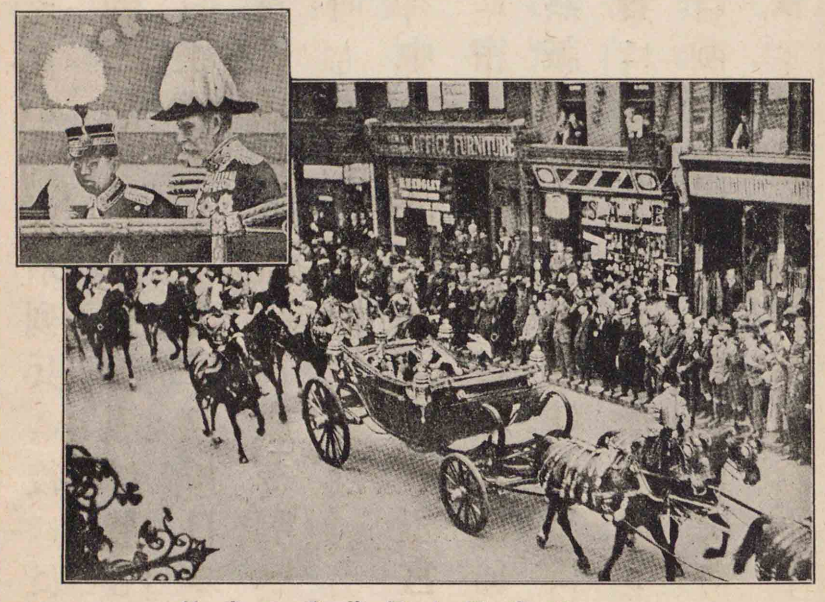
風景を御賞美遊ばされるのを承って、私共は其の推察の誤らなかった事を確め得たのである。

零時四十分御召列車はロンドン市のヴィクトリア停車場に著いた。驛には英國皇帝陛下が躬ら第二皇子のヨーク親王・伯父君のコンノート親王を御同伴、外務大臣・宮内大臣等を隨へて御出迎になり、東宮殿下と簡單な御挨拶を御交換になった。

かくて英國皇帝陛下は、再三上席を御辭退遊ばす東宮殿下を、四人乘の御馬車の最上位即ち御自分の右側に御請じになり、東宮殿下の御前には、ポーツマスまで御出迎の英國皇太子殿下、其の右に珍田供奉

自、親

請待



東宮殿上御著英の光景

長が著席したのであった。又閑院宮殿下には、第二の御馬車にヨーク親王と御同乘、他の供奉員は、接伴員と相交って鹵簿に加った。

沿道の兩側には兵隊を堵列せしめ、「君が代」の奏樂は、停車場から王宮に到るまで絶

鹵簿　行列

堵列

えなかった。堵列兵の後には、拜觀者が黑山を築いて御通路を埋めた。彼等は最もよく秩序を守って手を振り帽をあげ、又中には日本の國旗を手にして最も熱誠に日本語で「萬歳」を唱へ、又は英國の「フレー」を絶叫した。

中にもバッキンガム王宮前に奉迎の最好の一角に密集した在留日本人は、何れも歡喜に輝く面持で熱誠に御迎へ申上げた。そは固より東宮殿下の御安著に對する歡喜の輝であることは言を俟たぬ所ではあるが、他に又英國官民が擧ってかくまで我々の戴く皇儲――内家の殿下を歡迎してくれるのかと

こぞる

儲君、儲貳

いふ感激の輝が交ってゐない筈はなかった。聞けば此の奉迎の好位置は、其の日に集ったロンドン市民が、自發的に讓り合って日本人の爲に特に與へてくれたのであったといふ。

自發的

一時五分卤簿は肅々とバッキンガム王宮に著し、御車寄前の廣場で殿下は儀仗隊を御閲兵になり、それより「弓の間」（ボールーム）といふのに御入りになった。此の宮は謁見に用ゐる大廣間で、紅の絨毯を布きつめてあった。窓の外には美しい綠の芝生が展開されてゐる。東宮殿下には、幾多の高官の侍立する裡において、皇后陛下・メリー内親王殿下等と御會見になり、我が天皇

陛下の御鄭重な御傳言を兩陛下に御傳へ遊ばした上、殿下より兩陛下に供奉員全部を御紹介になった。

午餐後、皇帝陛下から我が東宮殿下に、英國陸軍大將の御資格とバース頸飾章とを御贈進になった。これは國際間に於て、しば〳〵例のある事で、英國が日本に對する特別の好意の表象である。

英國の御滯在は、初の三日間が皇室の賓客、後の五日間が政府の賓客であらせられる事に定まつてゐた。それ故殿下には、閑院宮殿下御同伴、珍田供奉長・山本御用掛等を隨へさせられてバッキンガム王宮に御宿泊遊ばされ、他の供奉員は英國政府が用意した

宮内書記官伯爵二荒芳徳・外務書記官澤田節藏合著

或名流の家に宿泊する事となった。

バッキンガム王宮の御滯留は、東宮殿下におかせられては、最も深い御印象を得させられた事と思ふ。兩陛下は常に殿下に對して何彼と御心配あらせられ、恰も御自分の御子樣ででもあるかのやうに御世話を遊ばした事は、御側で拜する我々の感激に堪へなかった所である。

（皇太子殿下御外遊記）

七　旅先なる父へ

二千四百餘の手紙今朝お達し有難く拜見

いらせらる
恐悦
御留守、罷在
御噂
乍去

仕りは愈々機嫌よく入らせられ恐悦に存じ
奉りは此許一同毎日貴方様を思ひ心配
成し下さるものゝくは毎日晩食の折柄思ひだ
林しき様にて父上様より其ぬ伺の出越なされ
はそんなどの噂申上げは後は例のめく一まき
星賑に騒ぎはことにこの度は札幌の花はまづく
開き申さるゝは由いかゝる寒地とは申せ餘なる
お速と驚き入り申はさりながら梅櫻桃李一
時に開く有様はさぞあて珍らしき見物に

慣、馴
隨って
ふせる

成あるべく存じ奉りは扨私事学校も段々
お慣れ数学も漢文も英語も何もむづかし
はゝども勉強して分りはゝば誠におもしろく朝
も通学の道程遠く成りは割合よりも早
速に成り母上様より古袋を蒙りはし
隨って武次も順ぶる負けぬ氣にて早く相
成り近所の道連を誘ひ立つる大将様に
相成りは悌三郎も三日前發熱頭痛致し
はゝども一日助りはのみにて有合せの薬にて直り

時よりは常に優しかりし敬子能く
飲みよく眠り能く大小便もの苦はさぞ
貴達へ御さるべくと申たり此度長崎寺内氏
よりカステラ到来その節の事申村吉老人
にたづねさせし際お示き一回にて賞味致
しかの寺内氏へはこれ状差出し置きし其の他
用事は母上様より近く申上げらるべく今
夜は縫物致居ぎゆゑ私より申上げし庭は
真青にあかり本蓮も八重椿も散々牡丹

御申上相成るべく
まつさを

作者
理學博士
三好學

二つ今朝咲きしチューリップは二つ
三つ桜草蓋が盛にて躑躅も山吹も咲
きたりかの先は返事つゞく毎に斯
の如くに度し　謹言

四月二十六日夜　文一郎

父上様
侍史

○園藝の樂

園藝といふと、意味が甚だ廣いが、畢竟人工によつて野生の植物に或る變化を起させ、特殊の風致を添へて面白

盆に栽える

く見せる手術であつて、之が爲に葉や花の形色などが美しくなり、又果實や種子の發生・性質が善くなるのである。併し園藝の中にも色々の區別があり、又目的に因つては、植物の體の中の或る特別の部分ばかりを發達させて、他の部分をば却つて殊更に發達させないやうにする必要がある。隨つて園藝上の手術は中々複雜なものである。

現今は園藝が甚だ盛で、之に關する著述や雜誌の類も大分世間に現れて來て、或は會として園藝を研究するものもあり、或は個人としての熱心家もあつて、段々此の趣味を世間一般に普及して行くことになるのは、甚だ慶ぶべき事である。

元來園藝の樂は何處の國の人も持つてゐる。殊に日本では昔から固有の園藝術が行はれて、例へば彼の盆栽な

固有の造庭法

どのやうに、外國にも比類のない特殊の趣味を持つて居るものがある。其の上に又日本固有の造庭法もあり、此の方面に就いての經驗も少くないが、近頃になつては、又西洋の園藝術が傳來して、次第に行はれて來る傾があるから、此の點についても一つの新方面を開いたのである。

園藝の樂は、實に高尚であつて、且健康にも宜しい。餘り凝り過ぎて、附屬品や裝飾品に多大の費用を掛けるのは無益の事で、普通の園藝は何人でもさしたる費用がなくて出來る。殊に忙しい職業や精神を過勞する職務に從事して居る人達には、朝夕の僅の時間を此の方面に利用して、無邪氣な草木に對して居ると、暫時の間は總べて世の中の俗事を忘れて精神を慰め、身體を益する上に効力があることは必然である。必しも態々遠方に旅行をする必

趨勢、傾向
見る地、立場

要もなく、又特別な機械や道具が入る譯でもない。僅な庭の中でも出來る事であるから、園藝の慰は誰でも行ふことが容易である。

園藝は一種の美術とも謂ふべきものであらうが、近來は又園藝と文學とを調和する趨勢になつて來た。文學的見地から園藝を觀察したり、又凡べて植物の品性に詩歌の情趣を寄せるやうになつて來たのである。斯樣な詩的園藝や文學的園藝も亦一種の面白みのあるもので、又此の方面の研究の行はれるは喜ぶべきことであるが、併し園藝其の物の趣意から言へば、植物の培養術の點に於いて、尙一層の注意を要することである。外國の園藝術が今日の如く盛になつて來たのも、其の大原因は全く學理の應用に外ならぬ。殊に亞米利加では、近頃學問上の理論を園藝術に應用して、種々の面白い驚くべき結果を奏しかけて居る。日本でも、是からは段々に在來の園藝上に學問の應用を見るやうになるは必然である。（園藝と學理）

作者
名は健次郎、文學者
平和の家
陸中下閉伊郡山口村
端午の節供
欒、巒、蠻、

八　平和の家

徳富蘆花

雪が消える。やがて青葉が茅屋の四面を包む。後の山に子規が鳴く。軒端に菖蒲を葺く。今日は舊暦端午の節供。一家團欒して「耳くじり」の式を終へた。此は長芋の小さなので耳に栓さし、本年中吉事を聞く樣、凶事を聞かぬ樣にと祝ふのだ。中座敷には祖母と父との爲に二つの膳が据ゑられる。「私がお給仕する、私が、

良平　篠原氏、本書の主人公

ぽっぽ鳥

私が」と爭うて、良平は黑塗の盆を控へて、祖母と父の前に坐るのであった。

五月の節供も過ぎて、向山に「ぽっぽ〳〵」と小鳥が鳴いて、春の日はうらうらと晴れ渡る。良平の母は勇み立って、「おお、ぽっぽがもう鳴いてる、昔から言ってる、ぽっぽ鳥が來れば粟播き時節だとさ。さあ〳〵みんな」と鍬を荷うて山畑に登る。

徳富蘆花

つゝじ

ひえめし

みゃうじゃう

「良平さん、今日は學校は休かよ」。

「あゝ休でがす」。

「そんなら山さ行くべいよ、一緒に。山畑は面白いだあ。山吹も咲いてる、躑躅も咲いてる、鶯も啼いてる。家ん中に燻って一日居るより、身體には結構だよ」。

「あゝ俺も行くべい」。

母について山畑に行く。松樹に上ったり、竹を切ったり、花を折ったり、遊んでる。やがて晝食時になれば、皆鍬とる手をやすめて、松の下に蓆を敷いて、谷川の流を汲んで稗飯を嚙む。

日は西に入る。一家明星の光を踏んで歸る。飼犬の

鹿毛

「やま」が尾を振って土橋の邊に出迎へる。鹿毛の馬は厩の中に衆人の負ひ來る若草の芳しいのを嗅ぎつけて、「ぶふっ〳〵」と鼻を鳴して居る。

蓆の御殿、藁の間　「某御殿の某の間」などいふに眞似たしやれ

手に〳〵、てんでに

松の根を金皿に燃した燈蓋は、明るく蓆の御殿、藁の間の臺所を照して、大きな鍋には一匹の鱒が煮られ、大祖母・祖母・父・母・兄・姉・良平・妹・僕婢皆集って、各自の前に木椀に盛って竝べられる。良平の椀には山の様に盛ってある。祖母が自分の椀の中から肴の切を挾み上げて良平の椀に入れ、良平の頭を輕くたゝいて「此のわんぱくめ」と云って去る。皆がどっと笑ふ。あとは靜に夜の幕が落ちて、圓かな夢に入る。（寄生木）

長府　長門國豐浦郡長府町

忌諱

行燈

九　乃木大將の舊宅

長府停車場を出ると、すぐ海岸に沿うて古い松林がある。此の松林を離れて次第に町の中央へと歩を進めると、昔乃木大將の嚴父十郎翁が政務上の意見を上陳して藩主の忌諱に觸れ、國元差下を命ぜられて長府へ歸著された當時、一先落ち著かれたといふ宿屋の小串屋が依然として存し、「定宿」と古風に書かれた古行燈が、昔を語り顏に其の軒下に懸って居る。小串屋の西南、程遠からぬ處に、二宮神社といふ小祠がある。其の鄰の横枕といふ小路を尋ねると、其處に

一木一草の微

「乃木將軍舊邸」と書いた木標が立って居る。此の邸址こそは最も興味ある場所で、其の廣からざる二百二十餘坪の邸内にあるものは、家屋・什器より一木・一草の微に至るまで、無限の教訓を我等に與へる。就中特に我等の注意を惹くものは、邸内の片隅に建てられた、實に見る影もない矮小な家屋である。

乃木大將舊宅の一部

自刀

拜領

此の家屋は、長府の有志者の組織した乃木大將記念會が、特に乃木大將の舊宅を模造して建築したもので、總建坪僅に八坪二合、六疊と四疊と二坪の土間とから出來てゐる。さうしてその六疊の間には、故大將と父翁並に母刀自との三體の木像が安置されてある。此の木像は故大將の甥長谷川榮作氏の作で、故大將が兩親より教訓を受けて居られる樣を寫したものである。又嚴父十郎翁が舊藩主から拜領された蒔繪の棚を始め、代々乃木家に傳った武器即ち二本の槍と薙刀・弓・矢・陣笠・流鏑馬用の綾藺笠・箙・具足櫃・刀掛・簞笥・本箱・机其の他の遺物が、此の座敷から次の四

疊の間や屋根裏等に配置されて、當時の有りのまゝの光景を示して居る。殊に珍しく感ぜられるのは、屋根裏を利用して一種の物置を造り、これに武器その他の器具が巧に置いてあることである。夜具の如きも、大風呂敷に包んで、綱車で上げ下しする裝置にして屋根裏に吊してある。これは此の家屋がもと門長屋であって天井がなかった爲に、十郎翁の特に工夫されたものであるといふ。其の他、鍋・釜・竈等を始め、挽臼・敷盥や、母刀自が内職の鹽煎餅・砧卷等の製造に使用された大きな古い木の操鉢がある。故大將が令弟眞人氏を相手に米麥を精げた「だいがら」即ち米搗臼

裝置
からくり

砧卷は餡菓子の名

が屋外の小庇の下にある。また故大將が米麥を精げながら讀書する便に供されたといふ本置臺が、小さな板で踏板の上に作ってある。

便に供す

此の粗末極る矮屋こそ我が乃木大將の舊宅で、其の當時如何なる大邸宅にも、否如何なる宮殿にも見出すことの出來ぬ嚴しさと麗しさとの、充ち滿ちた家庭の組織されて居た處なのである。

矮屋に充ちたる嚴しさ麗しさ

（恩師乃木院長に據る）

作者　慶應義塾大學、時事新報の創始者、明治卅四年歿す

一〇　人間の三種三等

福澤諭吉

智愚强弱は樣々にして、上智と下愚と、至强と至弱

上智下愚

とを比較すれば、同じ人類とは思はれざる程の相違あれども、社會の經濟上より見るときは、概して之を三等に分つべし。

癈疾（廢）

不具癈疾の者は天然の不幸として之を除き、生來

倔强

倔强の身體にてありながら、何等の才能もなく唯安

逞しうす

閑として飲食し、甚しきは放蕩無賴、常に他人の厄介となるのみか、動もすれば他を害して自分の慾を逞しうせんとする者あり。是等は最下等の人にして、社

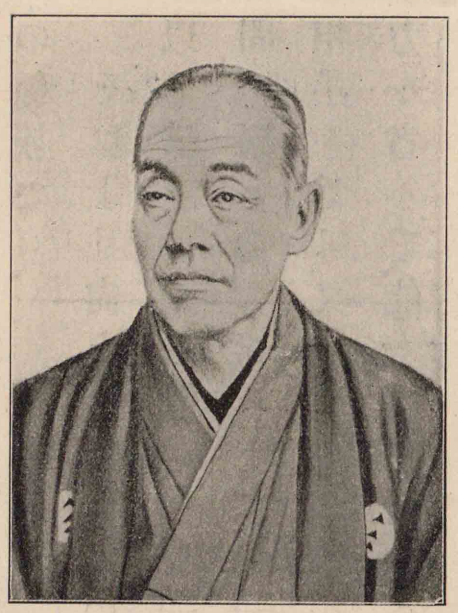
婆婆ふさぎこそ望ましけれ

會全般の爲に謀れば、此の種族の者は有害無益、俗に謂ふ婆婆塞ぎの邪魔者なれば、一人にても其の數の減ずるこそ望ましけれ。

曾て…關せず。戸外の事

與る（預）

一段を上りて、さまで人の世話にもならず、父母妻子と共に飲食するのみにして、曾て戸外の事に關せず、間接にも直接にも人に教へたることなく、又相談に與りたることもなく、一年に得たるものは一年に衣食し盡して、老後死後の謀を爲すに遑あらず、一軒の家を天地として、生れて死するのみなる者あり。此の種類の人は、一國の良民として決して邪魔者には非ざれども、社會人事の



福澤諭吉

累

盛衰には關係薄くして、此の世にありて大に益するに非ず、無くて大に不自由を覺ゆるに非ず、先以て中の種族なり。

それより尚上りて、教育の結果又は天賦の才力を以て活潑に立ち働き、一身一家の獨立既に成りて、世間の累を爲さざる上に、尚一歩を進めて他人の相談相手と爲り、又社會の利害を案じ、自ら自身の地位才力を省みて、能く事に當るべきを信じて、或は私に大に商賣工業を企て、或は公に政治上に關係し、或は地方の民利を謀り、或は宗教教育の先導者となる等、一身の働きを二分して、一は以て家に居り、一は以て世

身寄

に處し、公私兩樣の爲に力を盡す者、之を最上等とす。

以上三種三等の區別は、必しも其の人の貧富貴賤のみに因らず。時に或は富貴にして厄介者あり、貧賤にして重寶なる人物あり、之を筆に記するは難きことなれども、事實は明白にして、世人の常に知る所なり。例へば、一町村一郡一縣に人の死亡することあらんに、之を傳聞して其の不幸を悲むは人情の常なれども、之を悲むと同時に、又竊に私語し、「何某の病死誠に氣の毒なれども、實は地方遠近の爲に好き厄介拂なり。彼の親類身寄にてもまづ〳〵安心ならん」など、言はる、者は下等なり。病死の報知に接して、會葬は

したれども、不幸の沙汰は其の日限りにして、翌日より語る者もなきは、中等の人物なり。死亡の新聞に驚くは勿論、病中より様々の噂にて心配の折柄、いよいよ不幸を聞きて、其の地の人々まづ之を悲み、次いで之を惜み、「此の人に去られては」云々とて泣く者あり、狼狽する者あり、數年の久しき、尚人の口の端に殘りて消滅せざる者は、上等なり。

されば今人が偶然にも此の世に生れ出でて、其の一身の行狀より居家處世の法に至るまでも、上等にするか、中等にするか、はた下等に陷るか、其の上中下の差別は必しも學者先生に質問するを要せず、近く

云々

地方人心の向背を視察して之を知るべし。「社會は良師なり」といふ、即ち此の事なるべし。

（福翁百話）

作者
陸軍大將男爵、大正八年薨ず
野津道貫
後に大將伯爵
明治二十七年

一一　野津將軍と孝子

上　福島安正

日清戰爭が始って、まだ間もない頃だった。野津中將の率ゐて居る我が第五師團が、肅々として平壤に向って進軍し、九月十三日同師團司令部は洋々たる大同江の右岸なる堡山鎭に迫ったのである。其處の後方には小高い丘があって、それに登って遠望すると、平壤を守って居る清兵と正面より向った我が大島少將の混成旅團と、盛に砲火を交へ、其の煙が濛々

耳朶
勝敗の數
麾下
たまる（溜、堪）

と立ち登る壯烈な光景が手に取るやうに見え、殷々たる砲聲が頻りと耳朶を打つのである。其の頃は未だ清兵の實力を能く知らなかった時だから、敵の力を強いものと信じ、勝敗の數さへ豫測することが出來なかったのである。野津中將麾下の幕僚等は、何れも心配でたまらず、此の丘上に立ち、携へたる雙眼鏡抔を頻りと眼に當てて、戰況如何にと見入って居るのであった。すると偶、堡山鎭と大同江を隔てて横たはって居る丘上に當って、濛々たる煙が上った。最初は一同何だらうかと怪むのみだったが、それは、其處に居る朝鮮人が我が軍の主力が此處に來たと云ふ

あひづ
間諜

事を清兵に對して知らせる合圖であると云ふ事が、正しく分った。そこで一同憤慨し、「敵の間諜（かんてふ）となってゐる朝鮮人を逃してはならぬ。それ間諜を捉へろ」と曰って、直に一隊の兵をやって川を渡らせ、犯人に相違ないと信ぜられる一人の朝鮮人を捕縛した。

捕はれた朝鮮人は、自分が清兵の間諜ではない事を頻りと辯解したが、種々訊問して取調べると、どうしても此の男が合圖の火を擧げたと云ふ事が眞實らしくなって來たので、我が軍律の嚴肅な事を彼等朝鮮人に示し、彼等が再び犯す事のない樣にとの戒めの爲に、此の朝鮮人を野外に引出し、多くの朝鮮人

件の

等が見て居る目の前で、其の首を刎ねると云ふ事に決定した。

件の男は、兩の手を堅く縛られて幕營外に引出された。彼の命は正に風前の燈火と同樣である。然るに十二三歲位の子供が、此の有樣を見て居る朝鮮人の間から出て來たかと思ふと、「わあっ」と悲しげに泣き叫びながら件の男に縋り付いた。此の子供は捕はれた朝鮮人の息子であったが、親も亦子供が悲しげに泣いて自分の側に來たのを見て、ほろ〳〵と熱い涙を流す。子供は泣き〳〵我が軍の兵士に對して、何か云ってゐる。それは「自分の父は決してそんな惡事を

士氣旺盛

する者ではない。火をつけたのは外の人である。自分は其の火をつけた人を見掛けたから、其の人を探し出して來る。それまで父の命を助けて置いて下さい。どうぞ御願ですから」と、哀みを乞ふのであった。

我が軍の將士は、今や平壤の砲火を望見し殷々たる砲聲を耳にしつゝ、明日の未明を期して大戰鬪を開始しようとしてゐる時で、其の士氣頗る旺盛に勇氣凛々と云ふ氣勢であったから、人の一人や二人殺す位の事は何でもなかったのである。けれども此の子供の有樣のいぢらしさを目擊しては如何な猛者でも之を構はずに切る譯には行かなかった。最初は

子供を脅かしたり賺したりして見たが、中々承知せず、愈熱心に哀みを乞ふのであった。そこで暫く此の間諜の斬首を猶豫し一往他の犯人を捜索したが、素より他に犯人が有らう筈もないので、其の日の夕刻に及んで、斷然彼を馘首する事に決定した。

一往（ワウ）（應（オウ）は宛字）

馘首

一二　野津將軍と孝子　下

夕刻になって愈斬る事にはなったが、子供は益縋り付いて離れようともしない。之を無理に引放して了ふ事は敢へて困難な事ではないので、子供を連れて行かうかと云ふ者もあった。併しながら親子の情

敢へて……ない

に思ひ到ると、それさへ敢行する者は無かった。で間諜を斬るべき刀も之を拔かないで居たのである。

やがて此の事を野津師團長に報告した。すると慈悲深い師團長は、素より軍律の嚴肅でなくてはならぬ事を忘れたのではないが、其の情に引かされて「よし、それなら命だけは許してやれ。親が殺されると云ふのに默って居る者もないが、そんなに一生懸命になって親の命乞をするのは、中々感心な奴ぢゃ」と言はれた。

じひぶかい

斯くて此の朝鮮人の親子に對して、師團長の惠深い處置を傳へると、彼等は非常に喜び、子供は又々抱

歩武堂々

罪を贖ふ

行かせし（正）（許容）

きついて嬉しがる。此の有様を目擊した我が軍の勇敢なる壯士は、何れも眼に涙を浮べたのであった。

翌朝我が軍は歩武堂々進軍したのであるが、前日の命だけ宥してやった朝鮮人には、其の罪を贖ふ爲と云ふので荷物を背負はせる事にした。そして愈出發となると、子供は又々やって來て、にこ〳〵しながらさも嬉しげな顔つきで、命を助けられた禮を述べ、尙父と一緒に行かしてくれと云って、其の許可を得た。件の朝鮮人は人夫代りに荷物を背負って暫く行ったが、大分疲れてだら〳〵汗を流し、息をはずませて居ると、傍に居た子供はそれを見ると、「私が代って

せおふ、しょふ

とう〳〵

かよわい

背負ひますよ、お父さん」と云って、健氣にも父に代って其の重い荷物を背負った。

父は最初「お前なんぞに此の重荷が持てるものか」と云って居たが、段々疲れて來たので、とう〳〵子供に渡したのであった。大人でさへも疲れる位の重い荷物なのに、わづか十二や十三の子供に背負へる筈がない、と思って居たのであるが、親の苦痛に代って働くと云ふ熱心は偉いもので、うんと力を入れると、其の重い荷物を背中に載せて歩き出した。彼は全く親を思ふ孝心から、こんな力が出たのに違ない。やがて數町も纖弱い子供が荷物を背負って行ったので、

かはゆ、かわい、かあい
孝行に免ず

「偉い子供だ」感心に親孝行な子供だ」と、誰とはなしに感歎の聲を放つのであったが、遂に「かはゆさうだ。子供の孝行に免じて荷物を人夫に負はせろ」と云ふ命令さへ下った。

そして次の露營地に達した時、野津師團長は特に自分の前に親子の者を呼び出し、「汝は我が軍の爲には不利益此の上もない間諜を働いた大罪人で、當に斬首すべきである。併し汝の息子は、實に感ずべき孝子で、天下の模範とする事が出來る。子供の孝心は親の命を助けたが、更に孝行の褒美として此の金を遣すから、其の子供の教育費用に使へ。如何なる事があ

むだ
人倫

っても他の無駄な事に用ゐてはならぬ」と言ひ聞かせ、若干の金を與へて放免した。親子は狂喜して去ったのである。

野津師團長の此の處置は、武士道から言っても一般人倫の上から見ても、實に立派なものである。同師團長麾下の幕僚達は、何れも恩威並び到る此の處置に對して、感じたのである。其の後此の孝子はどうなったか知りたいと思って居るが、此がまだ生きて居るとすれば、我が軍の寛大仁慈なる處置に深く感謝して、今では善良なる帝國臣民となって居る事であらう。

（剛健の修養）

作者　名は辰之助、文學者、二葉亭と號す、明治四十二年歿す

宵の口

ひゃうくし

めった、めちゃ、むちゃ、

一三　犬ころ

長谷川四迷

嬉しいにつけ、悲しいにつけ、憶ひ出すのはポチの事だ。

春雨のしとゝと降る薄ら寒い或る夜のことであった。私は例の通り、宵の口から寢てしまったが、ふと目をさますと、耳元近くに妙な音がする。「こう」といふかとすれば、「すう」と或は高く或は低く、單調ながら拍子を取って、さながら大鋸で大丸太を挽き割る樣な音だ。私は夜中に滅多に目を覺したことが無いから、初はびっくりしたが、能く研究して見ると、なに父

音曲の手

の鼾なので、やっと安心して其の儘再び眠らうとしたが、どうもこれが耳に附いて寢つかれない。仕方がないから、聞えるまゝに其の音に聽き入ってゐると、何時からとなく囃しの手が込んで來て、合の手に、遠くでかすかにきゃん〳〵といふやうな音が聞える。鼾が凄じい時には、それに氣壓されて聞えぬが、鼾が低くなると、判然と手に取るやうに聞える。不思議に思って益耳を澄してゐると、次第に大きく高くなって、遂には鼾と離れ〴〵に慥に門前に聞える。

かうなって見ると、疑もなく小狗の啼聲だ。時々喉でも締められる樣に、げたゝましく、きゃん〳〵と啼

めいる

き立てる。其の聲尻がやがて段々と細く悲しげになって、めいるやうに遠いく處へ消えて行く。――かとすれば忽ち又近くで堪へきれぬやうに啼き出して、くん〳〵と鼻を鳴すやうな時もあり、「ぎゃお」と欠伸をするやうな時もある。

私はそっと夜著の中から首を出して、「小さい狗の聲だねえ、どうしたんだらう」とうるさく母にきくと、母はやさしく、「何處かの人が棄てた狗だらう」と一々説明してくれて、「もう晩いから默ってお寢」とあちらを向いてしまった。私も亦夜著をかぶった。狗は門前を去ったのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の鼾が

緣、椽

たわいもない

又うるさく耳に附く。寢られぬ儘に、私は夜著の中で棄狗の有樣を繰り返し〳〵考へた。

まづ何處かの飼犬が緣の下で兒を生んだとする。ちっぽけなむく〳〵したのが重り合って、首を擡げて乳房を探してゐる處へ、親犬が外から歸って來て、其の側へどさりと横になり、片端から抱へ込んで舐めると、小さいから、舌の先でたわいもなくころ〳〵と轉がされる。轉がされては大騷して起き返り、又よちよと這って、ぽっちりと黑い鼻面で、お腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探し當て、あわてて吸ひ附いて、小さな兩手で揉み立て〳〵吸ひ出すと、甘い

つひ遂に

溫な乳汁が出て來て、喉へ流れ込み胸を下って、何ともいへずおいしい。と、腋の下から、未だ乳首にあり附かぬ兄弟が、鼻づらで割り込んで來る。取られまいとして產毛の生えた腕を突っ張り、大騷をやってみるが、とう〳〵取られてしまひ、又そこらを尋ねて他の乳首に吸ひ附く。其の中にお腹がくちくなり、親の肌で身體も溫って、とろけさうな好い心持になり、つひうと〳〵となると、含んだ乳首が脫けさうになる。夢心地にもあわてて又吸ひ附いて一しきり吸ひ立てるが、ぢきに又たわいなくうと〳〵となって、乳首が遂に口を脫ける。脫けるも知らずに口を開いて、小さ

いたいけな

な舌を出したなりで、一同正體が無い。其の時忽ち暗闇から大きな腕がぬっと出て、正體なく寢入ってゐる處をむずと摑み、宙に吊す。驚いて目をぱっちりあけ、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張ってもがく中に、頭から何かで包まれたやうで眞暗になる。窮屈で息が塞がりさうだから、出ようとするが出られない。暫くもがいて居る中に、ふと足搔が自由になると、領元を撮まれて、高い〳〵處からどさりと落された。うろ〳〵してそこらを視まはすけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で、誰も居ない。ぼんやりしてゐると、雨にうたれて、見る間に濡れしょぼたれ、おそ

途方に暮れる

ろしく寒くなる。身慄ひ一つして「くん、くん」と親を呼んで見るが、何處からも出ては來ない。途方にくれて、よちくと這ひ出し、夜中に唯ひとり、温な親の乳房を慕って悲しげに啼きまはる聲が、さっき一度門前へ來て、又何處へかさまよって行った樣だったが、それが何時か又戻って來て、何處をどうもぐり込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

私はたまらなくなって、母に賴んで、此の小狗に食物を與へて一晩泊めてやることにした。犬嫌の父は、泊めた其の夜を啼きあかされると、うんざりしてしまって、あくる日は是非逐ひ出すといひ出したから、

うんざり

私は小狗を抱いて逃げまはって、どうしても放さなかった。父は困った顔をしてゐたが、併しこれも一時のことで、其の中に小狗も獨寢に慣れて夜も啼かなくなる。逐ひ出す筈のものに何時しかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒に捜すやうになってしまった。

（平凡）

作者
生物學者
槽

一四　動物の友情

松島種美

動物の友情に就いて面白い話が多い。嘗て露國の或る水族館に、大きなモロッコ蟹が幾つも同じ槽に飼はれて居ると、偶然にも一疋が水底に落ち込んだ。

あふむき

動かばこそ

根(コン)負(マケ)(氣)

深親切

生憎眞逆樣に落ちて隅のところの格子に仰向になつたものだから、自分の甲らの重さと相俟つて起き上る法もなく、唯苦んでばかり居た處が、是に氣のついた仲間の二疋が急に驅け付けて、先づ二疋とも水底へ潜り込んで、下から持ち上げたが、どうしてどうして動かばこそ、幾度の努力も空しく水泡に歸してしまつた。そこへ又他の二疋の新手が加つて同じ無益の努力を二時間あまりも續けたので、是を見て居た人が根負した位だつたといふ。又此の蟹は、仲間の脫甲の時には互に保護して、脫ぎ立ての軟い體をいたはる深切ものなのである。

由來

元來、一體

獨占

社會制度の發達と、又自身の重さの約四十倍の重量を運び得る怪力があるのとで、名高い蟻の仲間にも、此の友情は一層の進歩をして居る。由來此の虫の研究に從事した多數の人に知られて居る多くの事項の中で、先づ此の仲間の生活根本とも謂ふべきは食物分配の義務で、それが遺憾なく實行されて居るのは偉いものだ。己の發見にかゝる物でも、決して獨占はしない。又一度嚥み下したものでさへ、仲間のかつえてゐる者に對しては之を吐き出しても與へることは、何でもなく思つて居るらしい。

又蜂の社會にも注意すべきことが多い。蜜蜂は蜂

花形　決決　通用　たどる　至れり盡せり　なんぞ

の中での花形であるが、巣の入口に常に哨兵を立たせて居る。一同の爲に此の重大の責を負うてゐる哨兵は、自分の城に敵の侵入する事は、無論決して許さない。併し道に迷って困窮した旅の蜜蜂とか、幼い蜂の疲れて辿り着いたのをば、心から歡び迎へて、及ぶ限の手當もするし、若しそれが頭とか足とかに花粉の一粒たりとも着いたものならば、「職業は神聖なり」「働くものは正直なり」「勞働は生命なり」といふ主義を遵守する彼等の仲間の事とて、非常な尊敬を是に拂ひ、其の待遇も至れり盡せりである。

又夜なく吾々に害をなす鼠なんぞでも、中々友情の篤いもので、己の仲間で病み煩ふものがある場合には、一同その看護に怠らないのである。

（生物界の不思議）

作者　生物學者　覇王樹（サボテン）　檢、調

武器を具ふる草木

原田三友

○　武器を具ふる草木

生垣（いけがき）にする刺（とげ）だらけの枳殼（からたち）は、自分を護りながら人に利用されて屋敷を守って居ります。是やサボテンの刺は葉となるべき者の變ったのです。カラタチの刺は以前は枝の變ったものと思はれて居ましたが、學者がその出來る時の狀態を檢べて見た結果、さうでないことが分ったのです。その外、梅や石榴（ざくろ）にも刺があります。是は枝の變ったものです。處が薔薇（ばら）の刺は、葉でも枝でもなく、表面の枝

の持ち上つたものなのです。このやうに刺の素性は、植物に因つては一寸見た丈で分るのもありますが、本當の事は其の出來る時の狀態や內部の構造を檢べて見なければ、分るものでありません。山へ行つた時注意しなければならぬのはタラの木です。それは葉の軸にも刺が立ち列んで居ますが、その莖は一面に怖しい鉤が生えて居て、繪にある鬼の脚の樣で、誰でもぞつとしない人はありますまい。うつかりつかまらうものなら、大變な怪我をします。

又サルトリイバラといふのは、猿でさへ捕るといふのですから、人がこれの蔓つて居る內に踏み込まうものなら、鐵條網に懸つた樣に、どうすることも出來ません。昔から「荊棘道を遮り」などといふのは、必しもノイバラ丈を指したのではありますまいが、何れにしても脚を傷つけま

タラ　木獨活、うどもどき、鳥とまらず

イバラトゲ　荊棘

すから、寄りつく者が無く、野山を我が物顏に蔓つて居ます。

刺で面白いのはカラマツです。歐羅巴のアルプス山中では、その木の若い時に、羊がその芽を食べると、もつと元の方から刺の塊が出て、その內で芽が伸び出しますから、もう羊も食べられなくなります。かうして木の丈がのび羊が屆かなくなると、始めて普通の枝を出します。

南亞弗利加には、野豚といつて、猪のやうな獸が居て植物の根を食べますから、それを防ぐ爲に根に刺のある植物もあります。又一面に刺の生えたトゲイモといふ芋もあります。全體熱帶には大きな鋭い刺のある植物が澤山ありまして、それが茂つて居る爲に、一歩も踏み込めないやうな處もあります。

自分の物の樣に

唐松、落葉松

西暦千九百〇九年の事、處は東亞弗利加モサンビーク州のセイゴイ湖畔、人は北米合衆國前大統領ルーズベルト

ナンヂ人前の處の邊に住む人種

一五　獅子狩

ナンヂ人は、戰好（たゝかひずき）な牧民で、人畜を害する獅子を槍で突き殺す習慣が昔からある。余等が茲に着いた前日、彼等は牡牝の獅子を殺したといふ。着いた翌日は霧と寒雨で獅子は見えなかったが、其の翌日十一月二十日は面白く獅子狩を見物した。

朝食後余等は、カーク、スカリ、マウトン、ジョルダン、コルベット夫妻、チャップマン大尉と共に乘馬で銃を持って出掛けたが、只獅子を追ひ廻す目的である。一時間立つとナンヂの勇士等に追ひ着いた。彼等は

りゝしい

隆々たる

牛皮製の楯

least　アフリカ產の

hart　大羚羊

燈心草卽ち蘭（ヰ）

先發して高低のある草原を進んで居た。彼等は凛々（りゝ）しい赤裸の蠻人で、其の黑い皮の下には隆々たる筋肉があり、食するものは動物の乳・血・肉のみで、如何なる困難にも打ち克ち、危險を恐れず、豹の如く猛く、傲慢殘酷な面相の勇士である。其の髮飾は奇々妙々で、牛皮製の楯は面白く彩色し、右手には鋭い長槍を持ち、獸を突き又は投槍に用ゐる。勇士等が氷の如き長槍を玩具の如く振り廻すと、日光に輝いて目も眩むばかり、ハートビースト・斑馬（しまうま）・豚等は恐れて逃げ走る。午後に燈心草の茂った淺い谷に達した。余等は二哩も下り路を狩り立てた處が、四分の一哩前方に鬣（たてがみ）あ

雙、双

道を扼する

る獅子が不意に現れ、右手の深い草叢の方へ逃げたので、余等は馬上で追ひ掛けた。

此の獅子は、黑と鳶色の見事な鬣で、齒や爪や筋力は克く發達して獰猛無雙である。獅子は、丁度パートビーストを食って居たが、今や恐るべき敵に逢うたのである。余等は獅子を追ひ、わざと銃を持たぬ蘭人農夫は眞先に進んだ。獅子は茨の樹の下に立ち停ったから、余等は其の前を通り拔けて反對の道を扼し、槍手の來るのを待って挾擊しようとした。射てば射てるけれども、今日は只見物であるから差扣へ、六十碼の處に銃を構へて、萬一を警戒した。

うづくまる

追々に槍手が集り圓陣を造ってじり〳〵押し寄せ、楯を前に蹲って右手に槍を構へて居る。此の中に取り込められた獅子は、鬣を逆立て、尾を振り、口を開き、長い牙を出して、怒氣天を衝いて居る。槍手は無言のまゝ血を湧し、余等は手に汗を握って見物する。

此の時戰機既に熟し、槍手は詰め寄った。獅子は四方を眺め圍の最も薄い處に全速力で突擊して來た。危機一髪。槍手は楯をしっかと持ち、震へる槍を握り固めて防禦して居たが、隙を伺ひ隊長は流星の如く槍を投げ付けた。手疵に屈せず、獅子は前に居る槍手に飛び付いて來ると、件の勇士は其の槍を投げ付け

命を致し、死ぬせ、脊（セキ）、背（ハイ）

勝鬨を上げる

た。手練の早業驚くばかり、槍は獅子の肩から斜に反對の側の太股を貫き、致命傷を負はせた。獅子は痛手にも拘らず立ち上り、楯を抑へ、勇士の脊（せ）を摑み、爪で搔き裂く一刹那、又もや一槍飛び來り、獅子の體軀を貫いて穗先は白く突き出た。獅子は己を刺した他の勇士を捕へ、槍の穗先を握りながら息が絶えた。勇士等は、寄り集って負傷者の介抱をして、凱歌を奏した。獅子が攻擊し始めてから死ぬまで十秒とは掛らないかも知れぬ。始の六秒は槍手が防ぎ、三秒は槍が縱横に體軀を縫ひ、穗先は數吋も現れ、最後の一二秒は勇士を捕へながら斃（たお）れた。

犢、小牛

作者名は又次郎、宮

余等は早速負傷者の手當をしたが、手術後防腐劑を付ける時痛さうに見えた。余はカーク氏を通じて牝犢を彼等に與へると曰った。ナンヂ人は妻よりも却って家畜を愛するので、彼等は微笑して苦痛も忘れた樣である。勇士等は楯を差し上げ、深い調子で凱歌を歌ひ、獅子の死體の周圍に賑に踊り騷ぐ。頓て彼等は二人の負傷者を楯に載せて歸り、余等は他にも獅子が居りはすまいかと搜しながら野營に歸った。

（「ルーズベルト氏猛獸狩日記」に據る）

一六　美しき天然

武島羽衣

内省御歌所寄人
日本女子大學
校教授

尊しや

空にさへづる鳥のうた
大波小波轟々と
聞けや人々おもしろき
しらべ自在にひき給ふ

峰より落つる瀧の音
ひびき絶えせぬ海の音
この天然の音樂を
神の御手の尊しや

春ハ櫻のあやごろも
夏は涼しき月の絹
見よや人々美しき
手ぎハ見事に織り給ふ

秋ハ紅葉のからにしき
冬は眞白き雪の布
この天然の織物を
神のたくみの尊しや

薄墨ひける四方の山
くれなゐにひふ横霞

作者
文學者

Liege　白耳義の都會

海べはるかにうち續く
見よや人々たぐひなき
業も及ばぬかき給ふ

青松白砂の美しさ
この天然のうつくしを
神のちからの尊しや

あしたに起る雲の殿
晴れたる空を見渡せば
あふげ人々めづらしき
かく廣大にたてたまふ

夕べにかゝる虹の橋
青天井に似たるかな
この天然の建築を
神のみわざの尊しや

一七　獨軍の國境突破

菊池　寛

千九百十四年の七月下旬になると、リュージの人

人心恟々

心は頗る恟々たるものであった。リェージの要塞も密に動員をして彈藥の補充を行ったが、誰人も歐洲列强の間の協約の効力を十分に信じて白耳義の中立が絶對に安全であることを信じて居たが、兵營の士官達の間には、獨軍が白耳義の中立を犯すといふ說を唱ふる者があった。中でもゼラール中尉は、其の說の有力なる主張者であった。

白國を衝くか衝かぬかは、白耳義にとっては死活の問題であった。人々は皆獨帝の劍が北を指す事を心窃に祈ってゐた。たゞ白國人の中でゼラール中尉一人だけは、獨軍の國境突破の報を今かく〳〵と待受

滔々

けてゐた。白獨の國境からリェージまでの地方は、ベサール河とヴェスドレ河の流域である。樫や山毛欅の森林に掩はれた丘陵が其の間を點綴してゐて、清い冷い流の激しい小川が其の丘陵の間を幾條も流れてゐた。八月三日になると、もう苔色の軍服を著た獨の輕騎兵（ウーランス）が其の間に出沒し始めた。

四日の日は、獨軍の縱隊が幾つも、銀のやうに輝いて流れるヴェスドン河の谿谷に沿うてリェージに向って來た。リェージを護るポンチス・ルマン・ロンサン・バルションの堡壘は皆戰鬪準備にかゝったが、何人も滔々と限りなく續く獨の大軍を見ては、不安と

恐怖とに囚はれぬ譯にはゆかなかった。

市民達には義勇兵を志願する者が多かった。元來リェージの町は小銃製造地であったので、どの家にも一挺や二挺の小銃はあった。皆それを手にして思ひ〳〵の要塞へ駈けこんだ。要塞の士官達も、皆決死の色を湛へてゐた。獨軍の壓倒的の攻勢の前には、唯死があるやうにしか思へなかった。士官や兵卒は沈默の裡に懸命の努力を盡して居た。唯かうした悲觀的な緊張の中に、輕快に得意に立ち廻ってゐる士官があった。夫は無論ゼラール中尉である。

懸命

八月最初の木曜日に、獨軍は第一砲擊をリェージ

に送った。ポンチスの要塞が先づ之に應戰したが、リェージの各要塞では二三日前から實彈射擊演習を始めてゐたので、何時までが練習で何時からが實戰になったのか、唯砲聲のみを聞いてゐる市民には判らなかった。其の日の夕闇に乘じて、輕騎兵は堡壘と堡壘との間の十字火を浴びながら、リェージの町に向って突擊を試みた。ポンチスとパルションの堡壘は、もうとっくに沈默してしまった。リェージの命數は數へる事が出來た。翌日は獨の四十三珊砲が戰場にあらはれた日である。プロレン要塞も見る影もなく打ち壞されて居た。まだ應戰を續けてゐたのは、ゼ

十字火

とっく

ラール中尉の指揮してゐる第二砲臺と第八砲臺との二つだけであった。

（菊池寛傑作集）

一八　スパルタ武士

昔希臘にスパルタといふ國ありき。國民愛國の精神燃ゆるが如く、武勇の譽今尚高し。而してスパルタ人の教育の方法と生活の狀態とを聞く者は、此の聲譽の偶然に非ざるを知るべし。

スパルタ人は悉く武士にして、男子生れて七歳に達すれば國立の教育所に收容せられ、王子・王族といへども、家庭に人と成るを許されず。其の教育は身體

聲譽　評判ほまれ

の練磨と士氣の養成とを主とし、日常の學科は體操・武術・劍舞・軍樂等にして、讀み書きの如きは餘力を以て之を學ぶに過ぎず。教育所に於ける少年・青年の生活は、專ら廉潔・質素・克己・忍耐の氣象を鍛錬するを目的とし、其の規律は頗る嚴格なりき。寢ぬる時は、僅に一枚の敷蒲團を用うるのみ。其の蒲團は河邊の蒲の穗を集めて、自ら之を作らざるべからず。衣服は重着を許さず。冬も尚跣（はだし）にて靴を穿つを得ず。毎日河水に浴して、温湯を用うることなく、食物も亦極めて粗惡にして、飽食することを許されず。是、他日戰場に出でて飢渴に耐ふる習性を養はんが爲なり。

ふとん

饒舌

言語は、簡明を貴び饒舌を戒む。今日西洋諸國にて、言語の簡單明白なるを「スパルタ人の答」といふは此の故なり。又謙讓と從順とはスパルタ武士の最も重んずる所にして、長幼の序正しく、未成年者は、路を行くにも兩手をマントの下に入れ、視線を地上に垂るるを禮とし、揚々として濶歩するを得ず。公民は總べて未成年者を懲戒する權利を有し、懲戒を受けたる未成年者若し之を其の父兄に告ぐる時は、父兄は更に之を懲戒する義務あり。

揚々として濶歩す

二十歳に達すれば、始めて共同の教育所を出でて公民の列に入る。而も武藝の練習は終生之を怠るべ

からず。公式祭儀の席には、老若相合して武勇の歌を誦す。老人まづ聲を揚げて「我等は嘗て武勇なる壯者なりき」と歌へば、壯年之に次ぎて、「我等こそ今はそれなれ。知らぬ者はいざ試みよ」と歌ふ。少年亦之に和して、「我等はやがて更に武勇なる壯者たるべし」と結ぶ。

死を視ること歸するが如し

かくの如き尚武教育に鍛はれたるスパルタ武士は、死を視ること歸するが如く、瓦となりて全からんよりも、玉となりて碎けんことを希ひ、祖國の爲に一命を捨つるを以て無上の名譽としたりき。

こゝにスパルタ武士の面目の一端を見るに足るべき二三の美談を記さん。

自若として

「敵の軍勢山野に滿ち、大小の軍旗空を蔽ひて天日見えず」との報に接し、大將自若として曰はく、「然らば其の蔭に戰はん」。

敵勢雲霞の如く其の數を知らず。一將喜んで曰はく、「敵勢大なれば我等の名譽も亦隨って大なり」。一將又曰はく、「我等は敵軍の數を知る要なし。唯其の所在を知るべきのみ」。

敵軍將に寄せ來らんとすと報ずる者あり。將軍叱して曰はく、「敵我に寄するに非ず、我敵に寄するなり」。

スパルタ人の忠勇義烈なるは、獨り男子のみに非ず、女子も亦此の美德を分てり。一婦人其の子の出陣

武運拙し

に際し、自ら盾を取りて之に授けて曰はく、「勝ちて持ち歸れ。然らずんば之に乘りて歸れ」。

或る時の戰に、一時に五子を失ひたる母あり。人あり、來りて之を告ぐれば、先づ勝敗の如何を問ふ。我が軍勝てりと聞きて、喜んで曰はく、「我が子は祖國の爲に之を產めり」と。又或る時の戰に戰死したる勇士の母は、花冠を被りて街頭に集り、互に其の子の名譽を祝し、敵の包圍に陷りたる將卒の母は、固く戶を閉ぢて出でず、私に其の子の武運拙くして祖國の爲に死することを能はざるを悲めり。

（國定讀本）

作者
理學博士、東京帝國大學教授

火といふ聯想

一九　螢

渡瀨庄三郎

螢といへば、誰でも直に火といふ聯想をひき起すであらう。現に、わが國の「ほたる」といふ詞は、火垂又は火照といふ意から出たといはれて居る。又支那を始として、どこの國の詞でも、螢といふ名は皆火に緣あるものばかりである。誠にこの火といふ聯想が螢の命ともいふべきものであって、若しこれがなかったならば、恐らくは人の心を惹くことが、これ程でなかったであらう。それは、同じ螢科に屬してゐる昆蟲類で、その形が螢によく似たものも少くないに拘らず、

もみぢ。

景物

車胤貧にして常に油を得ず、夏月練囊を以て數十の螢火を盛り、書を照らして之を讀む（晉書）

その美しい光を缺いてゐる爲に、動物學者以外の人には少しも知られないのでも明である。

さてこの螢をば春の花・秋の紅葉のやうに、一種の景物として昔から詩歌・文章に作った例が、殊に東洋の國々に多いのは、今更いふまでもないことであるが、更に之を燈火の代に用ゐた例も、あの支那の晉の車胤の故事の外に、我が國にも西洋の國々にもまた少くない。

北アメリカのメキシコの海岸ではその昔海賊が横行して、屢通行の船舶を劫したので其のあたりを通る舟人は皆怖をなして、海賊の目に懸らぬやうに

と努めた。そこで夜中の航行には、船中に燈火を用ゐることを禁じ、その代として、この地に産する大きな螢を集めて入れた籠を乗客に渡して置いたといふことである。このやうな例はわが國の昔にもあって、これを忍の提燈に用ゐたことが古い小説などに見えてゐる。又ピートル・マーターといふ人の、アメリカ發見後三十年ばかりを經た頃の、あちらの事を書いた新世界といふ、書には「その地の土人が暗夜に深林を行くに、大きな螢をば足の拇指に縛り付けて、その光で道を行く。やがて螢が弱って來て光が薄らぐと、更に新しいのと取りかへて行く」といふことが載せ

提燈

マーター　十五世紀のイタリア人、イスパニア女王に仕ふ。

てある。

現に我が近江の守山・今宿地方では螢の光で夜道をたどる習慣があるとのことである。その地方は總じて螢が多く、小川に沿った田圃（たんぼ）道には、その岸の草村に數限ない螢が聚ってゐる。そこで杖で以て草村を叩くと、螢が強い光を放つから、どんな闇の夜でも、明にその行く手を見分けることが出來るといふ。さればこの邊の人は提燈のかはりに一本の杖を携へるさうである。

又キューバ嶋の邊では、螢を絲に繋いで婦人の胸飾又は髪飾としてゐる。この邊の螢は大きさが一寸

あふみ

田圃（ンボ）　「たんぼ」の宛字

行く手

キューバ　西印度諸島中、最も大きな島

ベーコン　十六世紀頃のイギリスの哲學者

餘もあって、光が大層強いから、その美しさは何とも言樣がないといふことである。又ベーコンといふ學者の書いた古い博物書には、小兒達が螢を透明な瓶の中に入れて川の中に沈めてその光に寄って來る魚を捕へた話が載せてある。

又ある畫師は螢の光で螢の畫をかいたといひ、近い頃佛國ではその光で寫眞を撮った人もあるといひ、我が國でも或る地方では、養蠶の期節に螢を籠に入れて蠶室に備へつけて、夜鼠の襲って來るのを防ぐといふ。

此のやうに螢の光を燈火の代に用ゐることは、各

國共に昔から行はれたことで、まだ燈火の發明がなかった開けない時代には、その需用が頗る廣かったのであらう。

（螢の話）

鵠沼　相模國高座郡、東海道藤澤の近傍

白雨　大きな雨

糸雨　細い雨

流れたり吸はれたりして

○　鵠沼の雨

徳富蘆花

突然降り出した暴雨が雷鳴電光の加勢を引き連れて崩れよ潰れよと茅屋を襲ったが、四時の時計が鳴るのをさながらの相圖に、すうと明るくなって繩大の白雨が何時か疎な糸雨となった。

止むを待ち兼ねて、僕は跣足で飛び出した。霽際の小雨がひやり〳〵と顔を撲って、足下には雨水が砂路を且流れ且吸はれて居る。青い雫の降りさうな竹藪の彼方で雞

漁（ギョ）　獵の音によむ

閼伽（あか）　水のこと

みよしは舳（ヘサキ）、其の先に綱を房の様に下げてあるのを、引茶を立てる茶筅に見立てたもの

が鳴いて居る。

雨は止んだ。南の方、大島の空にはまだ洋墨（いんき）色の雲がむら〳〵遠雷の響を包んで居るが、富士の方角は薄くなった綿雲（わたぐも）の間からぼうっと明光（あかり）がさして、海はとろりと白く澱（よど）んで居る。富士は見えない。併しむら〳〵卷き上る雲の下から、大磯・國府津（こうづ）・小田原・眞鶴（まなづる）あたりの山が濃（こ）い藍（あい）で抹（ぬ）した様に現れて居る。つひ對面（むかう）の江島はたっぷり水を含んで、今にも流れさうだ。水際に裸體（らたい）の漁師（りょし）が頻に小舟の閼伽（あか）を汲み出して居ると、此方に引き上げた舟のみよしの茶筅（ちゃせん）から、雫がぽたり〳〵落ちては小さな穴を砂に鑿（ほ）って居る。雨後の冷（ひや）〻した風が顔に當る。（思出の記）

二〇　橋中佐の最期　上

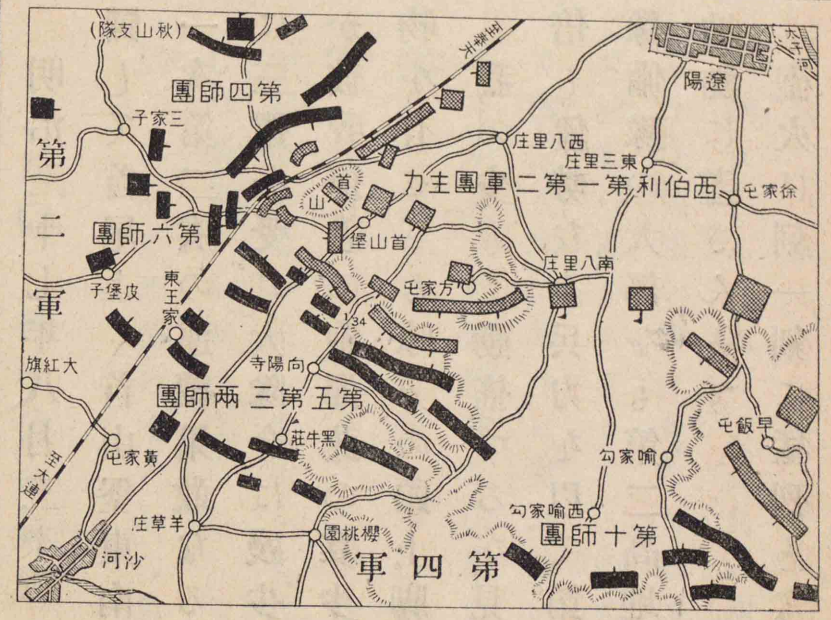
第三師團第十七旅團歩兵第三十四聯隊第一大隊長少佐橋周太（長崎縣の人）嘗て東宮武官たりき、戰功によりて中佐に進めり

首山堡は、遼陽の前衛たる要害地にして、東西高地の外に第一第二の高地あり敵の極めて重視せし處なり

明治三十七年八月三十一日黎明、橋大隊は勇戰奮闘して首尾よく首山堡東南高地を占領したるも、第一次第二次の連續果敢なる敵の逆襲に遇ひ、中佐身に三彈を受け、大隊今は殘少くなりぬ。時しも、天か命か、彼我掩護の砲彈、此の寡少にして而も據るべき地物を有せざる味方の頭上脚下に爆裂して、死傷益多し。我の少しく動搖するを見て取れる敵軍は、以前に倍し優勢なる兵力を以て第三次の逆襲を決行し、尚豫備隊の大部をも第二高地に集めて全力を此の一地點に盡さんとす。

砲火は刻一刻に猛烈となり、斜右左よりの敵彈は

十字火下



首山堡附近地圖

飛電急霰の如く、大隊は將に十字火下に葬られんとす。而も眼前には、左右の手に手に爆藥を携へ、或は劍戟を打振り、連發銃を擬して怒號し來る逆襲隊あり。我が兵隊伍を整ふるに由なく、唯思ひ思ひに突進して、死物狂に戰ふのみ。或は

殪(タフス)、倒、仆、

慘絶又痛絶

銃劍に敵を刺したるまゝ、射殪さるゝあり。或は敵彈に面部を射貫かれたるに心づかず、盲目的に射擊を續くるあり。或は携帶彈藥を射盡して小銃を棍棒の如くに振り廻しつゝ敵中に突入するあり。或は銃器を破碎せられて岩石の破片を投げつゝ戰ふあり。されば重傷して塹壕に在る者といへども、或は彈藥を補充し、或は足場を片づけて味方の動作を助くる等、凡そ息ある者一人として必死の防戰に與らざる無く、難戰已に其の極を越えて慘絶又痛絶の觀あり。中佐は自己の重傷を忘れて、目を瞋し眥を裂き叱咤怒號せる折しも、堡壘の中央部に爆裂せる一砲彈の大

破片、斜に飛んで其の腰部を摧けば、如何に剛勇なる身も、重ねぐ〳〵の重傷にたまり得ず、どうと後方に打倒れぬ。

第二大隊長鈴木少佐二個中隊を率ゐて來り援ふ

曩に來援せる第二大隊副官櫻井中尉偶その側に在り、之を助けて壕内に收容し、内田軍曹に命じて曰はく、「戰線の指揮一刻も忽にすべからず。隊長をば汝に託す」と、軍曹唯々死を以て隊長を保護すべきを誓ひ、直に危險の最も少き處に之を移し、繃帶を卷かんとすれば、溢血迸ること瀧の如し。而も中佐は苦しき氣息の下に、尚斷じて此の高地を死守すべきを命じて止まず。

ゆるがせに

唯々

此の間、正面及左翼面とも依然として益强硬なる敵襲を受け、銃丸と砲彈と岩石の破片とは相擊って空中を飛び、劇戰の項點と見えしが、如何にせん、我が兵は今曉よりの激鬪に筋骨休む間もあらざる上に、將校士卒一人として負傷せざる無く、彈藥は盡き刀又は折れ、銃口は破れ銃把は碎けて、戰鬪の餘力無きに至り、纔に來れる二箇中隊の後援も、敵の十字砲火を浴びて、死屍累々塹壕を埋め、血潮は屍間に河をなして流れぬ。斯くても剛勇義烈の我が兵は、一人となるまで此の高地を渡さじと、尚も壘上に最後の力を盡して防戰すれども、敵は益增加するのみ、衆寡の勢

折敷

餘りに懸隔して如何ともすること能はず、遂に一歩二歩三歩と無念にも押し返さるゝ有様となれり。

こゝに内田軍曹は、中佐の避難地が將に彼我の格闘場たらんとするを見るより、中佐の前に折敷きて「我が大隊の占領したる此の高地は、決して取り返さるゝ恐なし。隊長殿の負傷こそ捨て置かれれば、一先づ假繃帶所に赴きて十分なる手當を受けられては如何に」と促すに、中佐は默然たること少時、忽ち眼をかっと見開き、側なる軍刀を取って起たんとするより、軍曹は矢庭に奪ふが如く我が手に取り、「この軍刀は内田軍曹慥に預り申さん」と言ふや否や、瞬時も猶

狼穿

一刹那

豫ならずと、飛び付く如く己の頭を中佐の脇下に挾み、片手にしかと抱きかゝへて起ち上り、側なる白鳥伍長をして隊長の右手を扶け支へしめ、敵の屍を踏臺として辛くも塹壕内を出でしが、此の時眼に映じたる殘存の將校は、第二大隊長鈴木少佐と稲生・中野の兩中尉とあるのみ。軍曹等は、仆れたる屍を踏み越え踏み越え、一目散に高地を馳せ下れり。然るに正面高地脚には狼穿多く、且附近一面に網を張れる如く高粱を折り曲げて編み連れ、左右一帶は鐵條網を懸け渡して足の踏み入るゝ處なければ、軍曹は中腹より半右に方向を變へて數歩を走れる一刹那、突然左

胸部に痛みを感じ、「あっ」と叫ぶ間も無く、其の儘仆れて人事不省に陥りぬ。

二一　橘中佐の最期　下

暫くありて軍曹は夢の覺めたる如く眼を開けば、痛ましや隊長は側に眼を閉ぢて仰向に倒れたり。軍曹は忽ち其の身の重任を想ひ起し、負傷の苦痛を打忘れて這ひ寄りつゝ、「又彈を受け給へりや」と問へば、「胸部と左の下膊とを」と答ふ。軍曹近づきて熟く視れば、鮮血軍服を透して左右より迸り出づ。軍曹血を吐く悲しさを忍びつゝ、「隊長殿、心臓に異狀無きやうな

此の時傍に仆れ居たる重傷者の後に語るる所に據れば、中佐の左胸部を貫けるは強烈なる彈丸の餘勢軍曹の胸に中れるものなりといふ

れば安心あれ」と言へば、中佐は眼を開きて、「軍曹は何處を打たれたるぞ」。「否おのれは打たれたるにあらず、走れる勢にて石に躓き仆れたるなり。暫く御介抱を打捨てゝ」と詫びつゝ、高地の方を仰ぎ見れば、第二壘は既に敵の有に歸し、我が忠勇なる殘兵は、第一壘の塹壕を挾んで此處を墳墓と血戰せり。かゝる有樣にて敵彈又も中佐の身邊に落下する事頻なれば、此の上の負傷あらせじと、凹地に移して介抱せんと焦燥れども、體格小さき上に負傷せる軍曹一人にて、大兵肥滿の中佐を抱き上げんこと容易ならず。さりとて此の危險至極なる十死の巷に隊長を見捨て置くべ

算を亂す

くもあらずと、尚も匍匐して一小樹の立てる小凹地に到り見れば、我が負傷者算を亂して横たはれるが中に、傳令大塚一等卒及白鳥伍長も亦負傷して仆れ居たるを、呼び起し、三人力を合せて辛うじて凹地に移し、大塚の外套と他の一枚の外套とを下に敷き、内田の外套を卷きて枕とし、漸く中佐を安臥せしむることを得たり。此の間、隊長の出血夥しく、渴を感ずる者の如く、「大塚、水あらば少し得させよ」と請ふ。大塚は水筒を手にし、「隊長殿、水は傷に害あれば、少しづゝ幾度にも差上げん」と、水筒を口に當てゝ渴する喉を沾(うるほ)さしめぬ。

今曉の戰に中佐三人を斬りたり

兎角する間にも味方の勢ます〳〵危きに、内田軍曹の悲憤に堪へざる面持あるを中佐見てとり、慰めて「軍曹此の場に及んで憤慨することは止めよ。人を咎むべからず、運命なり。是非を言ふこと勿れ」と、感慨少時、再び軍曹に向ひて、「われ生れて四十年、未だ身體に苦痛を感じたることなし。されど今日こそは隨分」と言ひかけて口を噤み、やがて力めて微笑しながら「三人目を斬りたる時右手を打たれぬ。すぐに軍刀を左に持ち換へて四人目を斬らんとしたる時左手を打たれ、續いて腹部に彈丸を受けたれど、いまだ痛みを感ぜざりしに、砲彈の破片が強く腰部を撲てるに

は……殘念ながらそれより起つこと能はざりき」と物語る。軍曹さこそと點頭き、「軍刀は鋸の齒の如くになれり。血糊は其の儘拭はずに置きぬ。鍔は碎けたり。御身の痛みは如何にぞ」と問へば、「別に苦しくはなし。胸も腰も此の儘にして置け」と

橘中佐銅像

言ふ。中佐、やがて姿勢を正すものの如く體を靜平に保ち、聲は靜なれど嚴かに、「嗚呼今日は八月三十一日。我が皇太子殿下御誕生の吉日。此の目出たき日に於

いて一身を君國に捧ぐるは、此の上も無き榮譽なり。不肖周太の本望なり。たゞ多數の部下を餘儀なく損傷したるは、返すぐ〳〵も遺憾の極みなり。聯隊長殿に對しても、責任上面目なし」と言ひ了りて、涙に滿てる兩眼を閉ぢ、やがて又「聯隊長殿は如何に。聯隊副官は、我が副官は……某は」と、其の他の將校士卒の名を呼びて、其の安否を氣遣ひ、更に自己の苦痛を知らざるもの〻如し。

後援來れ衛生隊來れと、待ち詫ぶるかひも無く、全身次第に冷え、唇は益色を變じ、出血漸次甚しきを加ふ。中佐は愈堅く死を覺悟せるもの〻如く、從容とし

て「内田軍曹、我は夕方までは餘命あるまじ。いま一度高地を見ん」と起たんとするを、軍曹驚き止め、「高地は依然として我が大隊の手に在り。増援隊も今しばらくにして來るべし。心慥に待たれよ。大隊長殿の部下には義を捨てゝ命を惜むが如き怯者はあらず」と、決然として言ひ放てば、中佐はいとも滿足げに快く最後の微笑を漏せり。斯くて午後六時半中佐は嚴然たる姿勢のまゝ護國の鬼となりぬ。（大谷深造の文に據る）

時に中佐四十一歳、後陸軍中央幼年學校に其の銅像を立てたり

大谷陸軍少將

作者男爵、佛國飛行大尉、鴻飛行團に屬す

○　空中戰の二勇士

滋野清武

佛國戰線の華と謳はれた飛行隊は、砲兵測定や偵察や、追擊や、場合に應じて色々の活動をしたが、最も華々しいのは追擊戰鬪團である。最も優秀な飛行機を用ゐ、激戰地を安全にするので、役目も重大であり活動も激しいから、從つてはでな飛行團である。

砲兵測定　砲擊の距離を測り定ること

偵察　うかゞひみる

派手　宛字

行衛　宛字

鴻飛行團は、斯の如き追擊團中の華であつた。機體に白い鴻を描いた處からこの名を得たので、ギンヌメール、フオンク等の勇將傑士悉く此の出身である。

ギンヌメールは、人も知るフランス飛行界の大立物で、敵機を射落すこと五十幾臺に及び、敵もギンヌメールの機影を見ると、戰はないで逃げたものである。最後に彼が行方不明になつた時、恐らく戰死したのであらうと噂されたが、果して氣の毒にも、名もない獨逸の一飛行士に射

落されたのであつた。

ギンヌメールには、彼一流の戰法があつた。或る日、味方の陣地で、我々が引き上げて了つてから襲つて來た獨逸の一機があつた。是から飛び出しても逆も間に合はないから、齒切りをしながら敵の振舞を眺めてゐると、我々と一緒に出掛けて行つて遲れて居たギンヌメールが歸つて來た。さあいゝ見物だと眺めてゐると、ギンヌメールは、何と思つたか、正面から飛行機に向つた。タヽタヽと云ふ機關銃の音がすると、機首は俯して、その儘飛び去つた。その刹那、獨逸の機は轟然たる音を立てゝ火を發した。命中したと思ふときり〳〵と火に包まれた獨機は、兩翼を折られたまゝ遙なる彼方へ凄じい音を立てゝ墜ちてしまつた。この時ギンヌメールの使つた彈丸はわづか八發、彼

普通には後方から飛んで下つて行く

は正面に廻つて、敵機の通路へ眞向にばら〳〵と彈丸を蒔いた。すると進む敵機にどれか命中すると云ふ新戰術を發見したのである。「ギンヌメールを射落すものは、彼を知らぬものであらう」とまで恐れられた彼が、思はぬ最期を遂げて旬日、佛國の若い戰士フォンクは、偶然にも仇討をやつて、一躍して其の名を高くした。

フォンクは、それから戰爭の終了まで勇戰して、敵機擊落の最大レコードを作つた。獨逸のリヒトフォヘンやペルケが射落した百何十臺といふ數は、公表上だけで實は大變な懸値がある。現にペルケに射落されたといふ機行士が、佛國で働いてゐる例もある。然るにフォンクに於いては、一度見つければ必ず射落したので、其の數の八十餘臺といふのは、悉く彼が短い間に眞實に得た功名である。

五臺目を打つた後に、六臺目を飛び越して前に殘つた四臺目を打ちと二臺目を飛び越して又六臺目を打つと風に上下に飛ぶいふ樣が波の高低に似たのである

フォンクが一日に六臺の飛行機を射落して、レコードを作つたことがある。ある日彼が飛翔してゐると、縱列をなした六機に出逢つた。彼は先づ正面から一臺を射落し、次の機は下にくゞつて飛び越し、三臺目を射落し、今度は四臺目は上へ飛び越して五臺目と、丁度波形を描いて順々に射落してしまつて、人々を驚した事がある。

射擊にかけては、フォンクは全く神變不思議の妙手であつた。彼は最高勳章を受領し、代議士に選ばれ、「國法を變更してまで規定の年齡に達せぬ若者のフォンクを議席に列させた程、佛國の國寶とされてゐる。彼も亦我が鴻飛行團の勇士であつた。

（雜誌「現代」に據る）

二二　布哇より

拜啓。出發の際は御多用中態々橫濱まで御見送下され、御芳情の段厚く御禮申上げ候。御蔭を以て、十日間の航海甚しき風波にも逢はず、一昨日無事當ホノルに到着致し、直に當商會のものと相成り候間、御安心下され度候。爾來諸處見物ながら色々の事を仕込まれ、昨今事務にも取り掛り、少しく落着き申し候何も御存知に入らざらるべく候へども當地の狀況二三申上げ候。

布哇と申し候は、ハワイを始め八個の主なる島より成れる群島に之あり、總面積は我が四國位に當り候由。ホノルは、市は、オアフと申す島の南岸に在る良

港にて、布哇第一の都會、人口五萬許、官衙學校博物館公園等の設備も行屆き、歐米の都會にも劣らざる由申し候。全島の總人口は約二十五萬、其の一割五分は土人にて、他は米人を始め外國人に候が、日本人は明治元年四十八名の移住以來年々增加して只今は十二萬を超え、外人中の首位を占め居り候。此等邦人の大部分は、勞働者に之あり、主として甘蔗の栽培及製糖等の勞役に從事致し居り、邦人小學校の數、全島を通じて六十餘に上り候由。隨って當市の如きは總領事館・横濱正金銀行支店を始め邦人の商店軒を並べ、衣服食料以下本國の品物を求むるに何一つ不自由

サンドキッチ
千七百七十八年英國海軍卿の名を取る

之なく、三千四百餘海里を隔てたる大洋中の小島に參り候樣の感じは少しも致さず候。

本群島は、西曆十六世紀頃、西班牙人が發見せし者なるが、其の後英吉利人がサンドキッチと命名してより世に著れたる者の由に御座候。其の頃各地に割據せる酋長の中に全群島を統一して王國を創立せし英雄これ有り、其の銅像只今當裁判所の庭内に建ち居り候。爾來盛衰ありて千八百九十八年に至り、米國に合併せられ候者に御座候。

扨當地に參り候て最も意外に覺え候は、暑氣の凌ぎ易き事に之あり、熱帶地方とは申せ、八十七度を超

ゆることなしと申し候。それに海風吹き通し、夕立は度々かゝり、御地の夏よりは遙に樂に御座候。先は安着御報まで匆々斯の如くに御座候。敬具。

尙時下折角御自愛なされ候樣祈り奉り候。

（國定讀本參取）

作者　海軍大佐。此の「戰」の著者

水野廣德

二三　香港

香港は英國の領土なり。港門を過ぎて內港に入れば波靜なること池の如く、千八百呎のビクトリヤピークは、海岸より突兀として直に中天に聳峙す。宏壯なる石造家屋は海に沿ひ山を負ひて、層々段を爲し、

宛として

索道

鴉片戰爭　清人林則徐英人の支那に輸入する鴉片を燒きしより起る

香港

朱屋白壁、綠翠に連る景、船上より眺むれば宛として畫の如し。殊に勾配四十五度と稱する索道は、山麓より山上まで、唯一直線に綠林を切り割くこと一千餘呎、素練懸垂恰も瀑布に似たるものあり。

香港島は、支那廣東省珠江江口に位置し、面積約三十平方哩の小島に過ぎず。一八三九年鴉片戰爭の際英國に占領せられ、爾來引續き其の版圖に歸せり。元一小漁村

策源地

に過ぎずして、專ら海賊の巣窟たりしが、英國の占領以來、東洋經營の策源地として、鋭意發達に努め、今や人口四十六万人、貿易年額五億弗、日本よりの輸入額二千五百万圓を超え、商業の盛昌、實に東洋第一と稱せらる。帝國總領事館あり。在留邦人の數一千名を越ゆ。

香港の人口四十六万中、英人の數は僅に四千人に過ぎず、支那人の數は正に之に百十倍す。是を以て政治に關する以外、市の實權は殆ど支那人の手に歸せるが如し。香港總督は武官にして英政府の任命する所に係り、君主獨裁的の權力を有す。現在香港總督の

義和團といへる團匪の北京に起せる事變

管轄下に屬する土地は、英領香港本島の外、對岸九龍半島に於ける約二百七十六方哩の地と、附近の小島となり。此等の地方は一八九八年北清事變の際、新に九十九年の租借權を得たるものなり。

香港に於いて、見逃すべからざるものは植林事業なり。此の島はもと禿げ渡れる赭山にして、山骨到る處に露出して、暑氣酷烈瘴癘の氣深く、人間難住の地とせられたりき。然るに英人之を占領するに及んで、鋭意熱心、植林に務め、日本の松樹を選んで之を移植し、苦心慘憺數十年、遂に漸く其の目的を達し、今や全島蓊蔚として綠影四時深く、以て風致を美にし、以て

氣候を和げ、以て水源を豊にし、以て病疫の發生を減ずるを得たり。吾人は今眼前に綠翠滴る香港島を望み、其の能く岩石を化して綠林となしたる英人の熱心と努力とに敬服すると同時に、我が朝鮮遼東の禿山が、綠を以て蔽はるゝ日の一日も速ならんことを望んで止まず。

香港は北緯二十一度十八分、我が臺灣の南端鵞鑾鼻と略同緯度に在り實に南支の首都廣東の門戸にして、兩者恰も唇齒の關係を有す。海路八十浬、毎日二回の定期船あり、八時間にて達す。鐵路は、對岸九龍より百十一哩、發車日に數回、約四時間を費す。季候は一

唇齒の關係

般に暖にして、冬期といへども、内地の四月頃に相當す。三、四、五の三箇月は雨期にして、霖雨連日、陽光を見ず。香港名物たるペスト亦此の時に發生す。ペストは、香港の特有病にして、官民多年の熱心なる撲滅策も、未だ全く其の效を奏せず、毎年之に斃るゝもの、尠きも千を降らず、多きは萬を越ゆと聞く。但し罹病者の殆ど全部は支那人にして、洋人其の他の之に犯さるゝものは極めて尠し。されば洋人は、是を以て支那人病と稱し、毫も恐るゝ風なしといふ。（波のまに〳〵）

作者名は金之助、文學者、大正五年歿す

二四　峠の茶屋

夏目漱石

屈託氣

「おい」と聲を掛けたが返事がない。

軒下から奥を覗くと、煤けた障子がたて切ってある。向側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらり〳〵と搖れる。下に駄菓子の箱が三つばかり並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばってゐる。

夏目漱石

「おい」と聲をかける。土間の隅に片寄せてある白の

はひる

上にふくれて居た鷄が驚いて眼をさます、ク、ク、ク、と騷ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變ってゐる。其の上に眞黑な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜か分らない。さいはひ下は焚きつけてある。

返事がないから、無斷でずっとはひって、床几の上に腰をおろした。鷄は羽ばたきして、臼から飛びおりる。今度は疊の上にあがった。障子がしめて無ければ、奥まで驅け拔ける氣かも知れない。雄が太い聲でコケッコッコと云ふと、雌が細い聲でケケッコッコといふ。まるで自分を狐か狗の様に考へてゐるらしい。

とぐろを捲く
悠長
をさまる

床几の上には、一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が日の移るを知らぬ顔で頗る悠長に燻ってゐる。烈しかった雨も次第に收る。しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思ってゐた。竈に火は燃えてゐる、菓子箱の上に錢が散らばってゐる、線香はのんきに燻ってゐる、どうせ出るには極ってゐる。併し自分の店を明け放しても苦にもならないと見える處が、少し都とは違ってゐる。返事がないのに、床几に腰をかけて、いつまでも待ってゐるのも面白い。

寶生
活人畫
はうき
橋懸
表情
心のカメラ

其の上出て來た婆さんの顔が氣に入った。

二三年前寶生の舞臺で高砂を見た事がある。其の時、これは美しい活人畫だと思った。箒を擔いだ爺さんが橋懸を五六歩來て、そろりと後向になって、婆さんと向ひ合ふ、其の向ひ合った姿勢が、今でも眼につく。自分の席からは、婆さんの顔が殆ど眞向きに見えたから、あゝ美しいと思った時に、其の表情はぴしゃりと心のカメラに燒きついてしまった。茶屋の婆さんの顔は、此の寫眞に血を通はした程似てゐる。

「お婆さん、こゝをちょっと借りたよ」。

「はい、これは一向存じませんで」。

「大分降ったね」。

「生憎な御天氣で嘸御困りで御座んしょ。おう〳〵、大分御濡れなさった。今火を焚いて乾かして上げましょ」。

「そこをもう少し燃しつけてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなった」。

「へい、只今焚いて上げます。まあお茶を一つ」。

と立ちあがりながら「しっ、しっ」と二聲で鷄を追ひおろす。コ、コ、と驅け出した夫婦は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛び出す。雄の方が逃げるとき駄菓子の箱の上へ糞をした。

刳抜盆

無造作

「まあ一つ」と婆さんはいつの間にか刳拔盆の上に茶碗を載せて出す。茶の色の黑く焦げてゐる底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に燒きつけてある。

婆さんは袖無の上から襷をかけて、竈の前へうづくまる。自分は懷から寫生帖を取り出して、婆さんの横顏を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね」。

「へえ御覽の通りの山里で」。

「鶯は鳴くかね」

「えゝ毎日の樣に鳴きます。此の邊は夏も鳴きます」。

「聞きたいなちっとも聞えないと、尙聞きたい」。

「生憎今日は先刻の雨で何處ぞへ逃げました」。

折柄竈のうちがぱち〳〵と鳴って赤い火がさっと風を起して、一尺あまり吹き出す。

「さあ御あたり、さぞ御さむかろ」。

といふ。軒端を見ると、青い煙が突き當って崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんでゐる。

「あゝ好い心持だ。御蔭で生き返った」。

「いゝ具合に霽れました。そら、天狗岩が見えます」。

逡巡として曇り勝なる春の空を、もどかしとばかりに吹き拂ふ山嵐の、思切りよく通り拔けた前山の一角は、未練もなく晴れ盡して、老嫗の指さす方に、荒

逡巡

削の柱の如く聳えるのが、天狗岩ださうだ。（漱石全集）

作者　理學博士、東京天文臺長

二五　流星

平山信

試に月のない晴天の夜、仰いで限のない蒼空を見渡すとき、忽然と現れ、忽然と消える流星が、恰も火の矢のやうな速度で、天の一方から一方へ流れるのを見るであらう。あれが流星である。流星は必しも明るく光って尾を長く一直線に曳くばかりとは限らない。中には爆然たる音を發して、暗處から暗處へ滅するものもあり、又は燦然たる光輝を放って、宛ら花火のやうな流星雨といふものもある。抑此等の流星は

さながら

ぢんあい
むへんさい
る。がく

何物であらうか。

言ふまでもなく、流星とは天體の一部である。天體といへば、直に何千哩といふ大きさを想像するであらうが、天體は必しも大きくはない。更にそれよりも大きな宇宙に比べて見れば、眞に塵埃に等しい。その塵埃が無邊際の宇宙間を飛び廻る光景は、或は太陽の周圍を廻る地球のやうなものもあり、或は地球の周圍を廻る月のやうなものもある。而して偶地球に接近して空氣の中を突き拔けるものが、例の美しい流星となって、燦然たる光輝を暗夜の空に描くのである。學者の研究によれば、「普通の流星は平均七十四

ふつぎやう
意に介せぬ

哩位の高さで光を發し、平均二十五哩の速度で進んで、地球上五十哩の高さまで來ると、消える」としてある。即ち肉眼に見えてから消えるまでの間は、約一秒時間である。

日没よりは夜中、夜中よりは拂曉といふやうに、次第にその數が增して行く。その割合は丁度拂曉が日暮の二倍前後になってゐる。年に就いて言へば春夏よりも秋冬が多い。

さて地球全體の上に落ちる流星の數を調べて見るには、まづ五六人の人が觀測に從事せねばならぬ。隱顯出没、自由自在、敢へて人界を意に介せぬ流星で

あるから、中々肉眼で見盡せるやうな、狹い範圍内にばかりは現れぬ。されば五六の人が前後左右に間斷なく瞳子を配る必要がある。一方地球上には、五十哩乃至百哩を隔てて、隨處に觀測所を設けて、假に地球全土の觀測所を一萬とし、五人の觀測者が、各一人に就き一時間平均十の流星を觀たとすれば、一晝夜に地球全土に向って落ちる流星の數は、實に千二百萬である。この外に肉眼で見えないで望遠鏡に映るのを加へたら、その數は實に驚くほど多いのである。

隨處

作者　號は孤雁、文學者、早稻田大學教授

二六　震災記

吉江喬松

九月一日の厄日は、東京をほとんど全滅に近きものにしてしまった。一日の午前十一時五十五分は、呪はれた瞬間である。

地震と共に火が一時に四方に起った。帝國大學の燃える火の子が我々の住んで居る窪地へ降りかゝり始めた。震動は連續してやまない。不安は次第に迫って來た。煙の中の太陽は、まが〳〵しい一度見たものには終生忘れられない病的な赤銹びた面を漂はせてゐた。

上から見れば、全地平線の半は盡く火の波である。思ふまゝに荒れ狂ふ火の波である。八九階目から折

大正十二年

窪地

れた淺草の凌雲閣は、その殘骸を火煙の中にさらしてゐる。ネロンの眺めたローマの光景である。

不安の一夜、戸外で過した殆ど不眠の一夜は明けたが、立ちのぼる煙は空を覆うて、空氣は咽せかへるばかり、奇妙な暑苦しさが人々の全身を包んだ。避難者は昨夜からかけて、陸續として常は人通りの少ない筑波臺下の路に入り込んで來た。

陸續

筑波臺は田端驛の上の高臺

この自然の大災害の前では、我々は手も足も出せない。せめて罹災の人々に道を教へ、湯水の一杯でも供し、言葉の慰安を與へ、疲勞した人々に僅てもの休息の場處を提供するより外に、さし當っては方法が

つかない。この果しなくつゞいて來る疲勞し切った避難者は、立ちかはり入りかはり、樣々な悲慘な歷史をもって我々の前に現はれ、休み、語り、やがてまた何處ともなく立ち去った。なかには、終夜疲勞しきった身體を我々の家の前の腰掛でやすめ、地上へ敷いた薄緣の上へおろして、動くことも出來ぬほど弱って居る人々もあった。

薄緣

上野廣小路

二日の朝の空は、一層物凄く我々の上に近く赤色を漂はせた。上野の停車場を燒き、三橋（みはし）附近を燒いた火が、一度池の端を七軒町の方へ伸びて來ようものならそれから袋のやうになって居る動坂方面は、一

たまりもなく燒かれてしまふといふ不安が、刻々人々の心裡を領して來た。それに陸續としてつゞく上野・淺草・下谷方面からの避難者の波は、その不安を抱いてゐる人々を、その中へ捲き込まずには措かなかった。

けれど、道路は身動きも出來ぬ人波である。家の前には、疲勞した人々が立てこめて居る。何處へ脫れ出るといふ心よりは、落著いて運命をまてといふ氣が一方には强く起って來る。逃げるといふよりは共に助け合へ。そして駄目ならば、それが運命である。實際このやうな場合には、人々は單純に善良になる。罹災

本能的の純良さ

の人々の間には、この本能的の純良さ、相互救助の氣分が、いかに現れてゐることであらう。自然の力の前に、人々は如何に協同の生活を求めてゐることであらう。

十一二歳の一人の男の兒が、小さな風呂敷包を背負って四ッ角に立ってゐた。何處か遠くから逃げて來たので、あらう。足袋はだしで、頭髪は煙とほこりだらけで、顏も眞黑くなってゐた。何處へ行くのかと聞くと、「判らない」といふ。「たゞ一人逃げて來たのか」といふと、「いや皆と一緒に逃げたが、なんでも此方のはうへ來たからやって來た。どうも判らない。多分向ふの

方へ行ったのだらう」と、もうその兒は泣くだけの力も涙もないやうに、ぼんやりそんな事を言ってゐた。「何處かこちらの方に知邊でもあるか」と聞くと、「知らない」。「何處から來たのだ」と聞くと、「昨夜上野の山で皆と一緒にゐたが、山へ火がついたもので逃げて來た」といふ。私はどうしたらばよいか、兎に角家へつれて來てやらうと思ってゐると、そこへ一群の避難者がやって來た。全く知らない人々だが、昨夜上野の山でつい近い處にゐた人達だといふ。「お前一人でどうしたんだ、兎に角俺達について來い。此度ははぐれては駄目だぞ。いゝか」。その兒は默って其の人達につれら

つい、つひ

俺「おのれ」の略

れて行った。全くその人々の家族の一員ででもあるやうに、自然にすなほに連れられて行った。此の時、私には水草を追ふ人々が持ってゐる自然の純良さ、それがしみ〴〵と思はれた。

（若き自然）

作者
名は雄藏、文學博士、早稲田大學名譽教授

夜もすがら

二七　大海原

坪内逍遙

大なるかな、大海原
朝に夕に、どう〳〵と
動き、轟き、夜もすがら
大浪小波寄せ返る。
いづこに打たぬ波を見ん、

いつ波の音を聞かざらん。
大なるかな、大海原。
世界の山々ことごとく
崩すとも、海は埋るまじ。
世界の川々絶間なく
注げども、海はとこしへに
不増不減の瑠璃の色。
長閑けき様は海にあり。
風なぎはてし春の沖に、
朧にうつる月見れば、
あらぶる心もなぎぬべし。

とこしへに

朝ぼらけ
蓬萊山

松島かげの朝ぼらけ、
蓬萊山もよそならず。
凄じさはた海にあり。
春秋二季の大あれに、
はやて起って浪立てば、
甲鐵艦も木の葉と漂ひ、
大高潮のさかまけば、
村々流れて跡もなし。
山は崩れ、川は涸れ、
國興亡し、人變り、
陸には古今の別あれど、

海原のみは開闢の
神代のすがたそのまゝに、
動き、轟き、寄せかへる。

坪内逍遙

二八　コロンブス　上

コロンブスは、西の方へ船を進めゆかば、遂には印度に達すべしと確信したれば、その志を遂げんが爲に、まづイタリヤのゼノア國に願ひ出でたるが、聽き届けられず。次にポルトガル王に願ひたれども、是また思ふやうにならず。この上はスペイン王に願はんと思ひ立ちし頃は、もはや旅費は盡き果て、妻には死

聽き届く

に別れ、悲しき事つらき事のみ重りけれど、よくそれを耐へ忍び、野宿をもし乞食をもして、やうやくスペインに着きぬ。かくて王に拜謁し、願の旨を申し試みけるが、王は「いづれ學者等に調べさせたる上にて」と答へ、やがて國内の大學者を召し集め、その前にコロンブスを呼び出し、種々の質問をなさしむることとしけり。コロンブスは一々熱心に明瞭に答辯して、首尾よく難問を切り拔け、やうやく學者に合點せさせ、まづよしと思ふ間もなく、

コロンブス

耐（堪）へ。
拜謁
首尾よく
合點せさせ

叶ひがたし

ふと國内に戰爭始り、折角聽き屆けられんとせし事も中止となりぬ。

かくて三年程經たりし時、突然政府より「其方の計畫は空論にて、とても實行の望なければ、採用叶ひがたし」と言ひ渡されければ、流石のコロンブスも大きに失望し、力なくもスペインの都を離れ、一時は或る寺院に身をひそめて獨り悲みに沈みたり。

されども元來剛毅なるコロンブスなれば、更に勇氣を奮ひ起し、再び王及王妃に歎願し、もし今度も叶はずば、イギリス・フランスへも渡りゆき、斃れて後已まんのみと、心中に思ひ定めけるうち、やうやく王の

かぢ

怖、おぢ、おそれ

くるひ

許可下れり。

かくて西暦一四九二年八月、大船の準備も整ひたれば、コロンブスは愈果知らぬ船路に立ち出でぬ。大船とはいへ、今日の帆前船にも劣る粗末なる船なれば、出帆後まだ三日もたゝぬうちに、一隻の船は舵を失ひ、修復のため凡そ一箇月も或る島に碇泊する事となりしが、その間に一夜テネリフと云ふ火山烈しく噴火して、夥しく石片を降らしたれば、水夫等怖氣づき、神の怒なるべしとて、船を出し兼ねたり。それをやうくに説得し、また船を進めたるが、翌月になりて磁石に甚しき狂生じぬ。水夫等驚き怖れ、もはや西

へは行きがたしと騒ぐうち、數羽の鳥見えたれば、多分陸に近づけるならんと、勢づきし甲斐もなく、それも間違と分りて、落膽し、立腹し、コロンブスを狂人なりと罵りて騒ぎ立つを、いろ〳〵に諭し宥めて、再び進行をつゞけぬ。

二九　コロンブス　下

かくて出帆後六十日餘となりたれど、見る限り茫茫たる大洋にて、何の見込も手がゝりもつかざれば、水夫等はコロンブスに欺かれたりとて怨み怒り、この上進まんとせば、コロンブスを海に投げ入れて漕

ぎ戻るべしと、罵り合へり。今はコロンブスもせん方なく、なほ三日たちても陸見えずば漕ぎ戻るべし、三日の間だけ待ちくれよと、賴みぬ。

あゝ長き年月の辛苦も水の泡となりたるか、中途にして歸ること怨めしとも口惜しとも言はん方なし。よし飢ゑて死なんまでも船を進めて見たけれども、肝腎の水夫等が言ふことを聽かぬを何とせん。我今空しく殺されなば、我が志を誰か繼ぐべき。さてさて殘念なることかな。三日のうちに陸見えずば、何とせん、あゝ何とすべき。かく思ひてコロンブスは立ちつ居つ氣を揉みけるうち、一日とたち、二日と過ぎて、

飢ゑて
肝腎

コロンブスの上陸

今日ははや三日となりぬ。

コロンブスは甲板に立ちつゞけて向うの方を見つめ居たり。時に十月十二日の眞夜中過ぎ、檣の上にて見張をなし居たる水夫は「陸よ〳〵」と叫びぬ。一つの島の見えたるなり。コロンブスの喜思ひやるべし。此の

時見つけたる島は、サンサルバドルと名づけられ、アメリカ新大陸發見の手始となりぬ。

コロンブスは、是より十年の間絶えず事業に力を盡し、なほ四たびほど西方へ航海せり。その間、或は大あらしに苦みしこともあり、或は讒言にあひてスペイン王に疑はれ、獄に入れられしこともあれど、決して志を變へず、勇氣を挫かず、死に至るまで働き續けたり。

人もしコロンブスの心を我が心となし十年二十年撓むことなく、めい〳〵の志す事に力を盡さば、世の中の事大抵は成就すべし。剛毅の精神の貴きを忘

絶(斷)え。

る、こと勿れ。

（中學修身訓）

○　コロンブスの卵

西洋に「コロンブスの卵」といふ諺あり。この諺は「事を創むるは難く、之に倣ふは易し」との意味なり。その由來を尋ぬるに、コロンブス、千辛萬苦を經て亞米利加を發見した る後、西班牙に歸りしに、國王その前古未曾有の大發見を成せるを嘉みし、コロンブスを上賓として一大盛宴を張り、國の大臣貴顯を其の席に侍らしめたり。時に坐客中、コロンブスの榮譽を嫉むものありて、窃に相語りて曰はく、「コロンブスの發見は、さまで稱するに足らず。かの國遠しといへども、元より天地間に現存する處なり。現存せる處を發見するに、何の難きことかある。たとへば嚢中の物を

未だ曾て有らざる上客（ジヤウキヤク）

探ると同じ。榮譽とするにも足らず、功業といふにも足らず」と。

コロンブス、此の話を漏れ聞きしかど、さあらぬ體にて、亞米利加の風土などを、側の人々に語り合へり。しばらくして食卓上の卵一個を取り、これを衆客に示して、「諸君此の卵を卓上に直立せしむることを得るか」と問へり。衆客は互に顔見合せて、一語の答をなすものなかりしが、稍ありて、コロンブスは其の卵を卓上にて一打し、一方を平にして、これを卓上に直立せしめ、衆客に向ひ、「諸君、直立することこと此の如し。諸君は之を見て必ず『容易のことなり。何人も能くすべし』といはん。もし容易ならば、何故に余に先んじて之をせざりしぞ。抑人の爲したる跡を見れば、世間爲し難きもの絶えてあることなし。今回の余が發見に於け

るも亦然り。諸君は余の爲したる跡を見て、容易の事なりとせん。されど、いまだ發見せざる以前は如何なりしぞ」といひしかば、坐客みな默然として一言もなかりきとぞ。是より「コロンブスの卵」といふ諺、世に傳りしなり。

（補習讀本に據る）

澁川玄耳

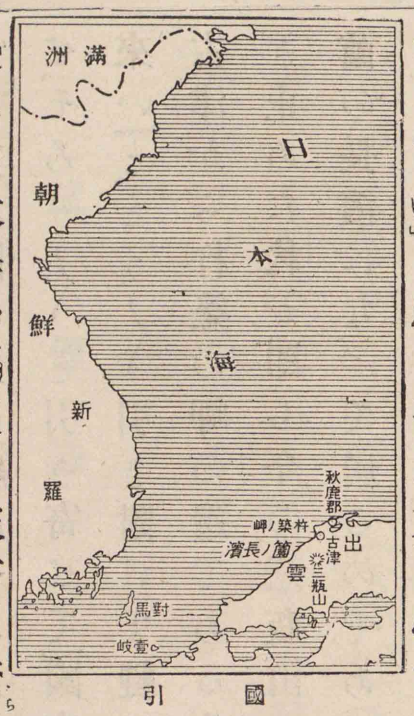
作者　名は柳次郎、辯護士にして文學を能くす

三〇　國引

伊弉諾尊・伊弉冉尊がお生みになった日本は、初の程は小さくて足りない處が多かったが、子孫の神々がだん〳〵に修理を御加へになって、今の様な立派な國となったのである。

出雲の國は取分け小さかった。極幅が狹くて帶の

様であった。素戔嗚尊の四世の孫、臣角命（おみつのみこと）といふ方が、「いかにも、これでは狹過ぎる。ちと縫ひ足さなければならない」と思し召し立たれた。



そこで海岸の巖の上に立って、何處かに國の餘りは無いかと、遙に西の方を御覽になると、漫漫たる大海を隔てた彼方に新羅（しらぎ）の國が見える。

「おゝあるく、新羅の岬に國の餘りがある。あれを引き寄せて此の國に縫ひ合せよう」

古津　簸川郡北濱の海濱
杵築の岬　同郡杵築町の海濱
三瓶山　石見國安濃郡
薗の長濱　杵築町の南

と、臣角命は神通力をあらはして、其の新羅の國の出鼻をずばりと切り分けて、さて三撚の大綱を打ち掛けて其の國の片に結びつけ、えいや〳〵と手ぐり寄せ、そろり〳〵と引き寄せて『國來い、國來い、此處まで來い』と、とう〳〵引き附けて縫ひあはせられたのが、古津から杵築の岬の邊である。此の時國引の綱を繫ぎ止めた杙が即ち今の三瓶山といふ山。又其の綱は薗の長濱になって居るのである。

まだこれでも出雲の國が小さいので、今度は北の方に國の餘りは無いかと御覽になると、滿洲の方に大分廣い處が見えた。早速其處を切り分けて、又もや

たとへ、ことわざ、世話

三撚の綱打ち掛けて、『國來い、國來い、此處まで來い』と引き寄せてつぎ合せられたのが、今の秋鹿郡あたりになった。

『今少し足さう』と言って、東北の方を探して、其の國の餘りを引き寄せ、とう〳〵今日の出雲國がすっかり出來上ったのである。

（日本神典古事記噺）

三一　俚諺

蒔かぬ種は生えぬ。
燈臺もと暗し。
善は急げ。

弘法も筆のあやまり。
飯粒で鯛を釣る。
武士は食はねど高楊枝。
下さる物は夏もお小袖。
笑ふ門には福來る。
一寸の蟲にも五分の魂。
神は正直の頭に宿る。

かうべ

作者　名は隆吉、文學者
葛飾　東京市の東郊

三二　田園の雀

北原白秋

庭の澁柿が赤く色づく頃から、私の草舍はまるで雀のお宿見たやうになってしまひます。葛飾田んぼの雀は、其の赤い澁柿ばかりを目懸けて四方から群って來るやうです。さうして澁柿が腐って落ちれば落ちる程、集って來る雀の數は愈多くなるばかりです。寒さも愈寒くなって、後にはたった一つも赤い實は殘って居ないやうになると、今度は雀が鈴なりになってしまひます。

人家の傍の田を作るものではない、と云ふ話です。見渡す限の稻の穗波が愈黃金色に色づいて、晩秋の風にさわ〳〵と搖れ立つ頃になると、所謂千羽雀の時節になります。其の雀の數の多い事は、全く、千羽雀と言っても千羽位の數ではありません。何千何萬と

も知れぬ雀の群が、彼方にも此方にも黑胡麻のやうに亂れ落ちたり飛び揚ったり、遙の空から稻の穗波とすれ〳〵に金色に光って、羽ばたき羽ばたき、なだれ來るかと思ふと、思ひがけない近くの田圃から、又入れ變りに擾れ立って逃げたり、又は向ひ風に專念に羽ばたく雀、激しく吹き分けられて二羽三羽と方々へ外れて、向き〳〵に頭を縮めて羽ばたく雀、たった一羽になって翼を細かにちぎれる程振り切って、何處へ行くとも知れず小さく飛んで行く雀、さう云ふものが、唯の一羽でも鳴き立てぬ雀はないのだから、其の騷しさ喧しさと云ふものは無いのです。取り

…と云ふものは無い

分けて赤い〳〵太陽が本所邊の濛々と煙って居る幾百とも知れぬ大煙突の向うに落ち懸って、西一面に赤く照り反す日の暮時の群雀の姦しさは、全く耳が聾になる程です。

百姓の方でもたまらなくなって、ほう〳〵と田んぼへ出て追っては居ますが、其の聲は何となく寂しいやうに聞えます。追はれる雀は悧巧です。自分達の下りて居る田から一番近い家の庭の樹立を目懸けて逃げて來るのです。ぱっ〳〵と羽音を立てて、まるで驟雨の襲うて來る慌しさで、一時に逃げて來ます。そして樹の上で一しきり鳴き騷ぎながら、一つには

溜る、耐へる

仔細に

欣喜雀躍

様子を仔細に觀、二つには疲を休めて新しい元氣を付けると、又向うへ行った百姓の後から、元の田んぼへ一齊に飛び下りる、又追はれて逃げて來ると云ふ風です。其が朝から晩までだからたまりません。逃場所の有る家の近くの田んぼなどは一番に荒されてしまふ譯です。

此の時節こそ雀の一番の收穫時であって、雀は全く欣喜雀躍です。少々遠くの都會からでも、此の頃は晝は總出で出稼ぎに出ます。葛飾でなくとも田んぼの有る限、雀はそこらの電線や木の上に鈴なりです。赤い夕燒の空に火の見梯子が遠見に染り、近くの電

寒さうな

あふぐ

線に雀が尻上りや肱立てをやったり、まるで器械體操か輕業見たやうな身振で、前後も知らずに踊り返って居ます。

いよ〳〵寒い冬の日が近づくと、道端に架け渡した掛稻の上にも、何羽となく雀が日向ぼっこを始めます。村社の壞れかけた石の鳥居や、色のさびた赤い鳥居にも、稻束が架け連れてある。其の上にも雀が行儀よく一列に並んで、刈り盡して廣々となった田んぼ續きを眺めたり、落穗拾ひの寒々しげな姿を見下したり、遙に天の一方に眞白くなった不二の山の神しさを仰いだりして居ます。

千木の頂邊

ともすると、非常によく晴れた日などは、小高い丘の祠の千木の頂邊から、一羽の雀がちょんと留って日和見をして居る澄み切った姿さへ見受けます。

さうして幾日か寒々した日が續くと、愈霙まじりの粉雪が降って來ます。さうして百姓もちゞかめば雀もちゞかんで、何時の間にやら自然とお爺さんくさくなってしまふのです。

背戸の檜垣

耕作車の車輪を二つともはづして、背戸の檜垣に立て懸けてあると、夜の内に置いたか、夜明には霜で眞白くなって居ます。其の車輪の霜の上にも雀が珍しさうに止ったり、つっ突いて見たり、蔭の黍殼の霜の上に飛び下りたりして居ます。かう云ふ景色も冬のわびしさです。

（雀の生活）

三三　イソップ物語

一　黄金の斧

木切

河端で木を切って居た樵夫が誤って斧を水に落して酷く弱って居る處に、ふと水神が現れて、委細の譯を聽き取って、又水に隱れた暫くすると水神が黄金の斧を持って姿を現して、「御前の斧はこれか」と曰ふ。樵夫が覗いて見て「これでは御座りませぬ」といふと、水神は頷いて再び水に沈んで、今度は銀の斧を持

うなづく

って來て見せた。それでもないと言ふので、改めて水の中から鐵の斧を持ち出して、樵夫に返してやって正直なことを賞め、金銀の斧も褒美に添へて授けた。慾の深い爺が此の話を聞いて、翌朝わざ〳〵河へ行って斧を落し、さめ〴〵と泣いて居ると、案の如く水神が現れて、水の中から黄金の斧を持ち出して見せた。爺は周章てゝ、「それこそ私の斧です」と言ひさま手を出すと、水神は「この横著者、人の心を見拔く神が瞞されると思ふか」と叱りつけて、鐵の斧すら戻してくれなかった。

あわてる
戻す

二　北風と太陽

北風と太陽が、誰がえらいと爭ってとう〳〵旅人の外套を早く脫がせた方が勝といふことになった、最初に北風が、何の一めくりといふ勢で、力一杯吹きまくると、まくる程、旅人は一所懸命に外套の襟を押へて放さない。やがて太陽の順番になった。始の内、太陽がそろ〳〵と和に溫き日を送ると、旅人は外套の襟を開けて輕く肩の上に掛けたまゝ歩いて行く。其の内に太陽が有り丈の力を出して、かっと照りつけると、旅人は、二足三足行ったばかりで、外套をさっぱりとかなぐり捨ててしまった。

（藤岡作太郎及樋山正雄の文に據る）

作者
台は成行、文學博士
忠敬
東河と號す、下總國武射郡小堤村神保氏の子

一擧手一投足

三四　伊能忠敬の晩學　上

幸田露伴

忠敬、年十八にして、伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして、家をその子景敬に讓るまで、自ら抑へて、平々凡々の人となり、一意專心、たゞ伊能家の衰へたるを興し、おのが任務を最も圓滿に最も麗しく果さんことを期し居たりき。

およそ才氣ある者の常として、己が欲せざることには、一擧手一投足の勞をも惜み、單に己が欲することにのみ、身を委ねんとするは、免れがたき習なり。たとひ己が欲せざることなりとも、其の爲ざるべからざることとなる以上は、甘んじて我が情を屈し、我が氣を抑へて、我が爲すべき事をなすは、その人啻に才氣あるのみならず、又實に德量ある人と謂ふべきなり。

啻に…のみならず

伊能忠敬

世に才氣ある人は多し、才氣ありて德量ある人は少し。年少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刀の肉薄きが如し。物を截ることは能くすべし、折るゝ恐は免るべからず。されば世の、奇才を抱きながら成功を見ずして、中途に事を廢する例は、數へも盡しがた

丹誠おほきいなり

し。忠敬が、算數・曆術の學を嗜み、且之を能くすべき資を抱きながら、自ら甘んじて、市井の凡人に伍し、「伊能氏を嗣ぎたる上は、伊能氏を榮えしむべし」といふを、唯一の望として、三十餘年一日の如く、ひたすら家業に丹誠したるが如きは、實にその德量の大なるを見るべきなり。

かくの如くにして、伊能家は興りぬ、景敬は家を繼ぎぬ、一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は、是に於いて圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身は、是より忠敬の自由に用うることを得べし。この時、忠敬年既に五十歲、常人に在りては、もはや、老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歲の時も前途多望なる青年の春なり。爲すことある人には、如何なる場合もわが力を試むるに足るべきなり。忠敬は、常人が世の務を辭し花月の遊を事とすべき時に當りて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すことあらんと欲する者、苟も眞に爲すことあらんと欲せば、青年空しく過ぎて身の將に老いんとするを、歎ずることなかれ。

用ゐうる

老境に入る

青年空しく過ぎて身將に老いんとす

下總國香取郡

笈を負ふ

寛政九年に成る寛政暦と稱す

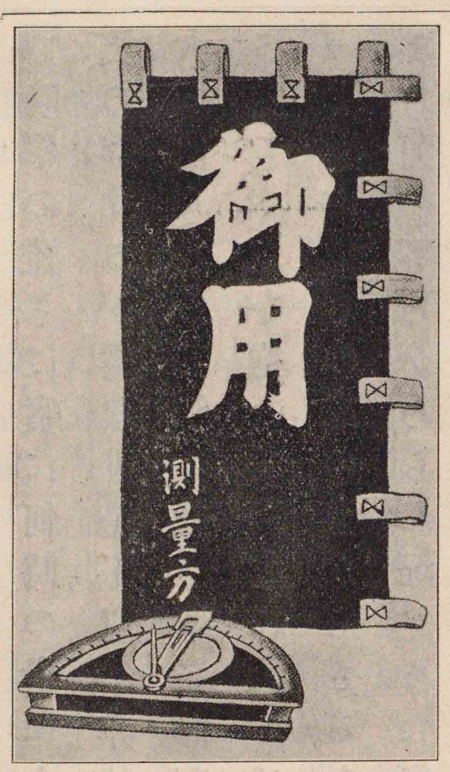
三五　伊能忠敬の晩學　下

さる程に、忠敬は、その鄕里佐原を出でゝ、江戸に來り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一樣の、笈を負ひて鄕關を出で都門に遊びて師を尋ぬる書生と異なる所は、唯その若きと老いたるとの差のみ。かくて忠敬は身を己が好める學に委ねたるが、己が滿足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。折柄幕府には暦法改正の擧ありて、之が爲に特に大阪より高橋作左衛門といふものを召されたり。作左衛門は東岡

強ひ。

流石

と號して、算數・暦象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服して、直に師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歳にして、東岡は三十二歳なりき。普通の人情にては、己より年若き人に會ひては、縱令おのが學業など其の人に及ばずとも、なほ強ひて自ら高ぶり敢へて頭を下げざるが習なれども、德量ある忠敬は、流石にさる事なく喜びてその



伊能忠敬の用具

門下生となれり。然れども同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば、屢笑柄となしたりといふ。

晩學の難きは、實に何時の世にありても、かゝる嘲笑の存するが爲なり。是を以て、非凡の士にあらずば、大抵自ら恥ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて墓穴に入るに至るなり。元來老いて學ぶは、その志の淺からざるを顯すに足るのみ、また何の不可かあらん。況やまた何の恥づべき所かあらん。思ふに、區々たる群小の嘲笑も忠敬に於いては、たゞ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしならん。かゝれ

志を抱いて

蛙鳴蟬噪

忠敬、寛政十二年始めて北海道蝦夷地測量の命を受く爾來殆ど全國に及び、文政四年七十七歳にて歿せり

ば、忠敬と同門生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明なることなり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して洪水のおし寄するが如き勢を以て歩を進め、終に其の學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべきものなきに至れり。

かくて、忠敬が、始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實に五十六歳の時なりき。五十六歳といへば、人は暮齡用うるに堪へずとする年齡なり。されど、忠敬は、氣力旺盛さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて喜色滿面に溢れ、即日にも出發せんとする勢

辟易

ありきといふ。忠敬が、事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂に其の志す所を完成したりしは、一に此の元氣勃々として燃ゆるが如き熱心を胸裏に藏めたるに因れるなり。誰か日本人を早熟・早老の人種なりと謂ふ。是豈我に伊能忠敬あるを知らざる者に非ずや。

（露伴叢書）

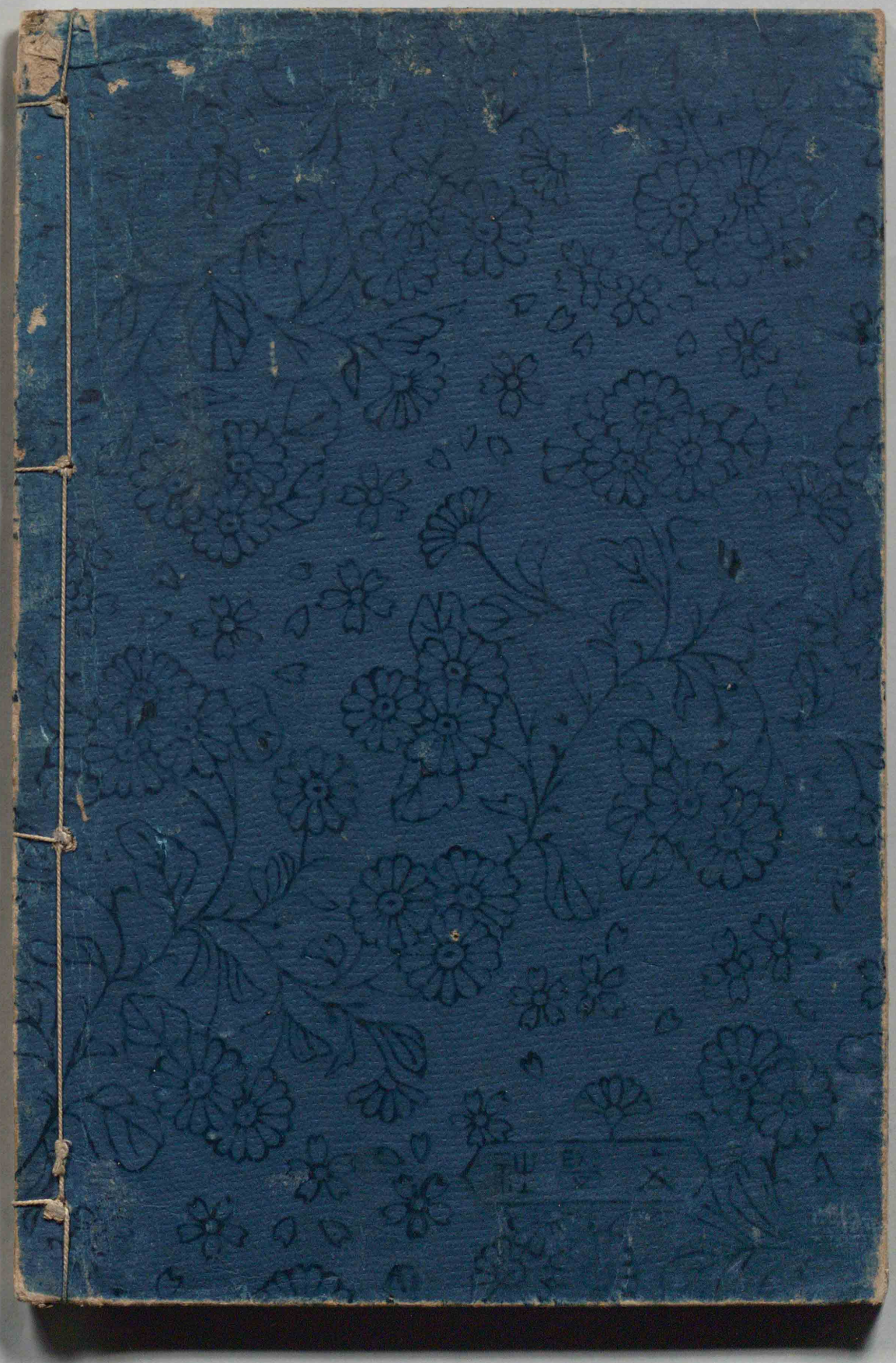
中等新國文　卷一　終

文部省檢定濟
大正十四年二月十七日　中學校用國語科教科書

大正十年十一月廿一日印刷
大正十三年十月廿四日發行
大正十三年十月廿七日訂正三版印刷
大正十三年十月三十日訂正三版發行
大正十四年二月十二日訂正四版印刷
大正十四年二月十五日訂正四版發行

著作者　故　矢重松
相續者　三矢夏井
修訂者　鳥野幸次
發行兼印刷者　小林竹雄
印刷所　文學社工場　東京市神田區蠟燭町四番地

中等新國文　全十冊
參壹　定價　金四拾壹錢
大正十四年度臨時定價　金七拾四錢
大正拾五年度臨時定價　金七拾錢

不許複製

發兌
文學社　東京市神田區美土代町二丁目一番　電話大手五五三四番　振替口座東京三八七八番
關西一手販賣所　盛文館書店　大阪市西區靱北通り二丁目　電話土佐堀一五二三番　振替貯金口座大阪七四三番